大津ロクベエ遺跡 II

一般国道470号線(能越自動車道)改良工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1994年

石川県立埋蔵文化財センター

大津ロクベエ遺跡 II

一般国道470号線(能越自動車道)改良工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1994年

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、石川県鹿島郡田鶴浜町大津地内に所在する大津ロクベエ遺跡第２次発掘調査の報告書である。

2．本調査は一般国道470号線（能越自動車道）改良工事に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部道路建設課、及び七尾土木事務所の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．現地調査は平成５年５月７日～同年６月30日にかけて実施した。

4．発掘調査は小嶋芳孝（当センター調査専門員）、北野博司、石井由美（以上当センター主事）、端猛（平成５年当時当センター嘱託）、立原秀明（当センター嘱託）が担当した。調査の参加者は下記の通りである。

調査補助員　横山昌英

現地作業員　浅瀬義信、池田夏子、岡田正一、岡田松枝、銭元ちよ子、谷渡末枝、土田ヨキ、土本眞佐子、前田和子（以上田鶴浜町大津）、橋口進（中島町中島）

〈延205人〉

5．本遺跡出土遺物整理作業は北野、端、立原、石井が分担し、横山の協力を受けた。

6．本書は第４章第３節を北野が担当したほかは石井が執筆し、編集も行った。

7．本書の刊行にあたっては、石川県立埋蔵文化財センター職員の木立雅朗、土屋宣雄両氏に多大なるご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

8．本書では下記の略記号を使用した。

ＳＤ＝溝状遺構　ＳＫ＝土坑状遺構　ＳＸ＝平坦面　Ｐ＝ピット状遺構

9．本書挿図で用いた方位は座標北である。

10．本調査の出土遺物、記録資料等は当センターが一括して保管している。

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　自然環境 …… 1
　第２節　歴史環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過 …… 4
　第１節　調査の経緯 …… 4
　第２節　過去の調査 …… 4
　第３節　発掘調査 …… 5

第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　地　　形 …… 7
　第２節　調 査 区 …… 7
　第３節　層　　序 …… 7

第４章　遺構と遺物 …… 10
　第１節　東側調査区 …… 10
　第２節　西側調査区 …… 25
　第３節　遺物の検討 …… 27

第５章　ま　と　め …… 33

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　自然環境

鹿島郡田鶴浜町は能登半島の中央部に位置し、町域は東西約８km、南北約６kmで約30km²の面積を持つ。北は七尾湾西湾に面し、七尾市、鹿島郡鳥屋町・中島町、羽咋郡志賀町に囲まれている。地形は概して平坦であるが、南西部の三引地区には霊山として信仰を集めてきた赤蔵山（標高179m）がそびえている。石動山に源を発する二宮川が町内の主要な河川であり、町の東部を北流し、七尾西湾に注ぐ。本遺跡の所在する大津地区は、中央付近を志賀町徳田に水源を持ち七尾西湾に注ぐ大津川周辺に位置しており、北部が海岸に面する以外は三方を山に囲まれている。大津の名から推察されるように、かつては港として栄えていたが、明治初年頃から埋め立てが始まり、入海であった所は一部を残し、現在では耕地として利用されている。

第２節　歴史環境（第１図、第１表）

周辺遺跡を概観することにより、歴史環境としたい。

縄文時代には本遺跡北方丘陵部に大津遺跡（６）、南方低湿地に大津くろだの森遺跡（２）、東部丘陵裾に大津堂ケ谷内遺跡（４）等がある。大津遺跡は縄文時代から中世にかけての遺跡であるが、平成３年度に当センターが調査を実施した結果、縄文時代前期後葉の、墓と思われる土壙・石組状遺構、竪穴状遺構等が検出されている。

弥生時代に関しては前述の大津遺跡で後期の土器等、近接する大津神社境内遺跡（７）で小形有樋式石剣、矢田遺跡（15）で土器が出土しているほかは明らかでない。

古墳時代には周辺に多くの古墳が築かれる。本遺跡西方には前方後方墳、方墳各１基、円墳２基からなる代田古墳群（25）、前方後円墳、方墳、円墳等25基で構成される徳田古墳群（13）が分布している。北方には円墳３基からなる大津古墳群（５）、円墳４基からなる大津東古墳群（９）が存在する。それらの存在を支える集落については殆ど明らかにされておらず、蛸島遺跡（12）、大津遺跡、大津神社境内遺跡、大津小学校遺跡（10）等で土器が確認されているのみである。

奈良・平安時代は、大津が外浦と内浦を結ぶルート上にあったため、重要な港としての機能を持つようになった時期である。大津小学校遺跡で生業の一端を覗かせる製塩土器が出土しているほかは、大津遺跡、徳田宮前遺跡（14）等が確認されている。

中世には能登国鹿島郡笠師保に属するが、集落跡は確認されていない。本遺跡を初め、墓地と推定される大津赤兀遺跡（３）、代田八兵衛地蔵墓（24）などがある。また、本遺跡近辺には五輪塔陽刻板碑等が点在しており、今なお墓石として使用されている。該期には赤蔵山が山岳信仰の対象となっており、足利兄弟の主導権争い『観応の擾乱』の際、尊氏方の吉見氏頼軍と直義方の桃井直信軍が攻防を繰り広げた『赤蔵山の戦い』では、大津からも援軍が送られている。なお、

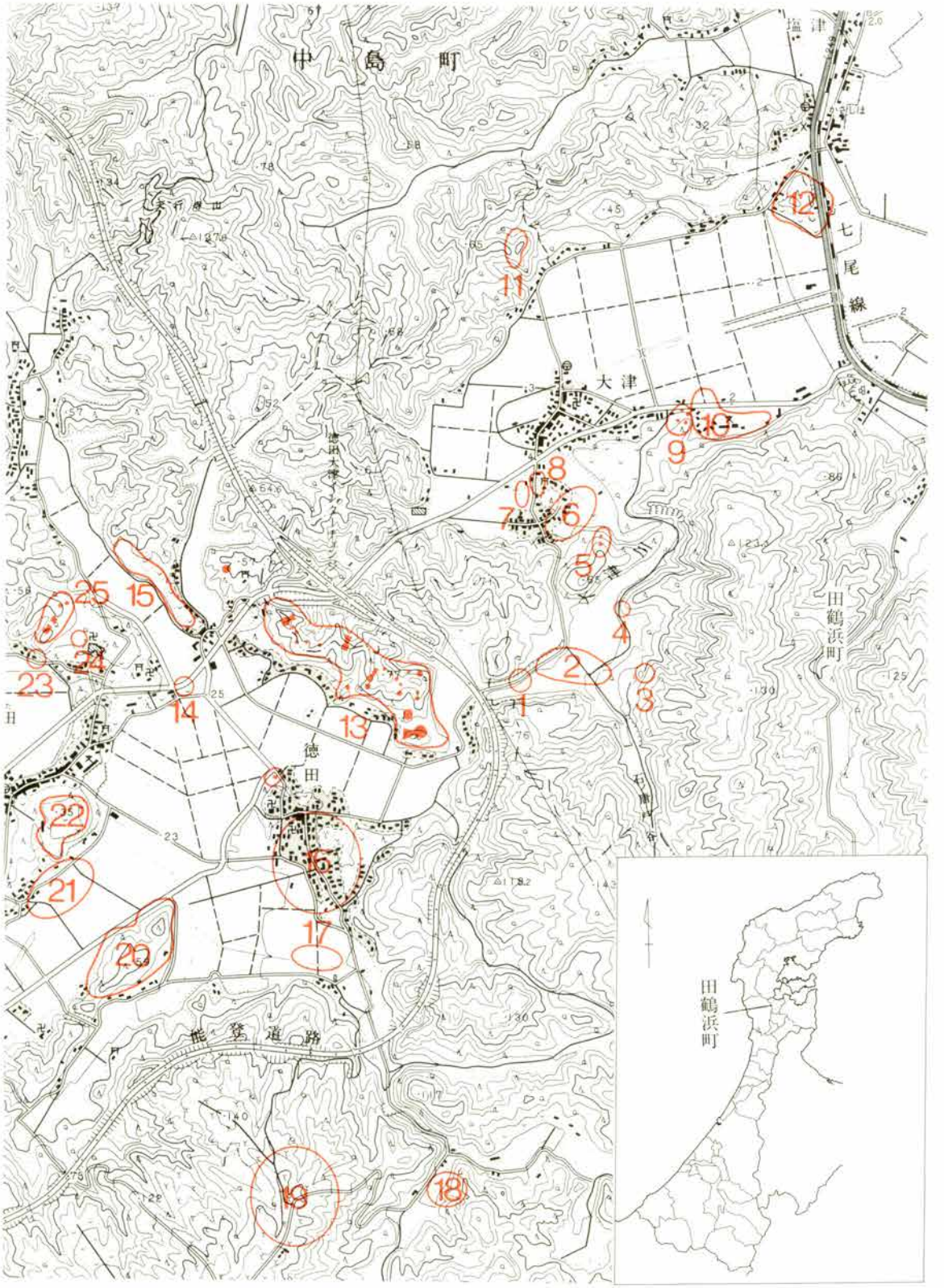
赤蔵山に関しては、現地にて採集された遺物より、平安時代に溯る可能性も指摘されている。[注1]

近世に入ると、当地を含む二宮川以西の鹿島郡西南部は「鹿島半郡」と呼ばれ、天正8（1580）年から長連龍一族の支配下に入り、寛文11（1671）年、加賀藩直轄領となる。当時大津は内浦街道の馬継所であり、外浦街道に続く大津往来が通っていたこともあって、水陸の交通の要衝であった。該期に属する遺跡は本遺跡のみであり、今後の調査が待たれている。

注1）宮下栄仁・垣内光次郎　1986　「赤蔵山遺跡採集遺物報告」『石川考古』第167号　石川考古学研究会

第1表　遺跡地名表

No.	県遺跡No.	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代	立　地
1	31013	大津ロクベエ遺跡	田鶴浜町大津	耕作地	古墳～近世	丘　陵
2	31012	大津くろだの森遺跡	田鶴浜町大津	散布地	縄文	平　地
3	31011	大津赤兀遺跡	田鶴浜町大津	散布地	中世	丘　陵
4	31010	大津堂ケ谷内遺跡	田鶴浜町大津	散布地	縄文	丘陵裾
5	31009	大津古墳群	田鶴浜町大津	古　墳	古墳	丘陵裾
6	31008	大津遺跡	田鶴浜町大津	散布地	縄文～中世	平　地
7	31007	大津神社境内遺跡	田鶴浜町大津	散布地	弥生・古墳	丘陵裾
8	31006	大津神社前遺跡	田鶴浜町大津	散布地	不詳	平　地
9	31005	大津東古墳群	田鶴浜町大津	古　墳	古墳	丘　陵
10	31004	大津小学校遺跡	田鶴浜町大津	散布地	古墳～奈良	平　地
11	31003	黒詰遺跡	田鶴浜町大津	散布地	不詳	丘　陵
12	31002	蛸島遺跡	田鶴浜町大津	散布地	古墳	丘陵端
13	29190	徳田古墳群	志賀町徳田	古　墳	古墳	丘　陵
14	29191	徳田宮前遺跡	志賀町徳田	散布地	奈良・平安	平　地
15	29192	矢田遺跡	志賀町矢田	散布地	弥生	平　地
16	29189	得田氏館跡	志賀町徳田	館　跡	不詳	平　地
17	29188	徳田渕ケ谷内遺跡	志賀町徳田	散布地	縄文	平　地
18	29187	得田コイデ遺跡	志賀町徳田	散布地	縄文	丘陵端
19	29186	得田城跡	志賀町徳田	城　跡	不詳	丘陵頂
20	29185	館開城跡	志賀町館開	城　跡	不詳	丘　陵
21	29184	館開テラアト遺跡	志賀町館開	散布地	縄文～古墳	平　地
22	29183	仏木新林遺跡	志賀町仏木	散布地	不詳	丘　陵
23	29182	代田遺跡	志賀町代田	散布地	不詳	丘陵端
24	29181	代田八兵衛地蔵墓	志賀町代田	墳　墓	中世	丘陵端
25	29180	代田古墳群	志賀町代田	古　墳	古墳	丘　陵



第1図　周辺の遺跡（S＝1／25,000）

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

一般国道249号線（能越自動車道）改良工事にかかり、平成２年９月27日付けで石川県七尾土木事務所長より鹿島郡田鶴浜町高田地内から同町三引、羽咋郡志賀町に抜ける総延長約６kmを対象にした分布調査の依頼があった。それを受けて平成２年10月８日、11月19、21、26日にかけて現地踏査を行い、試掘調査の必要な箇所が存在する旨を回答した。平成３年４月10日付けで試掘調査の依頼を受け、当センターが同年７月17日～８月23日にかけて実施したのを初めとし、平成４年６月～９月、平成５年９月13、14日に順次分布調査が行われた。現在も分布調査未了区が若干残っており、調査は継続中であるが、これまでに７遺跡、約38,000㎡にものぼる遺跡が発見されている。同事業に係る発掘調査の初めとして平成４年度に本遺跡第１次調査が行われた。

平成５年４月16日付けで七尾土木事務所長より依頼があり、同年５月７日より、当センターが現地調査に入った。

なお、能越自動車道の路線名は、平成４年度までは一般国道249号線であったが、平成５年度から一般国道470号線に変更されている。

第２節　過去の調査（第２図）

大津ロクベエ遺跡第１次調査は、町道より南側約1,300㎡を対象に、平成４年４月30日～同年９月25日にかけて行われた。調査区を東からⅠ～Ⅲ区に分け、Ⅰ区では三層にわたる分層発掘がなされている。その結果、縄文時代、中世、近世の三時期にわたる遺構、遺物が発見された。

縄文時代では自然河川が確認され、その堆積層から縄文土器・石匙が出土した。中世では土坑・畑の畝溝が検出されており、珠洲焼の甕・鉢・円盤状陶製品等が出土した。近世では井戸・道状遺構・土壙等が検出され、瀬戸・美濃系の水注、唐津系陶器の建水・皿、肥前系磁器の碗・皿等が出土している。道状遺構に関しては、大津往来との関連が指摘されている。

何れの時代においても建造物の痕跡は確認されておらず、周辺地域に居住地の存在を想定している。

また、第１次調査中に町道北側のトレンチ調査を行い、第２次調査に向けて遺跡の範囲を確定した。町道部分については、重要な遺構が伸びているとは考え難く、立ち会い調査を行うことで合意した。仮設道部分と併せて平成５年11月15・25日、12月６日に工事立ち会いを実施した結果、遺跡は確認されなかった。

第３節　発掘調査

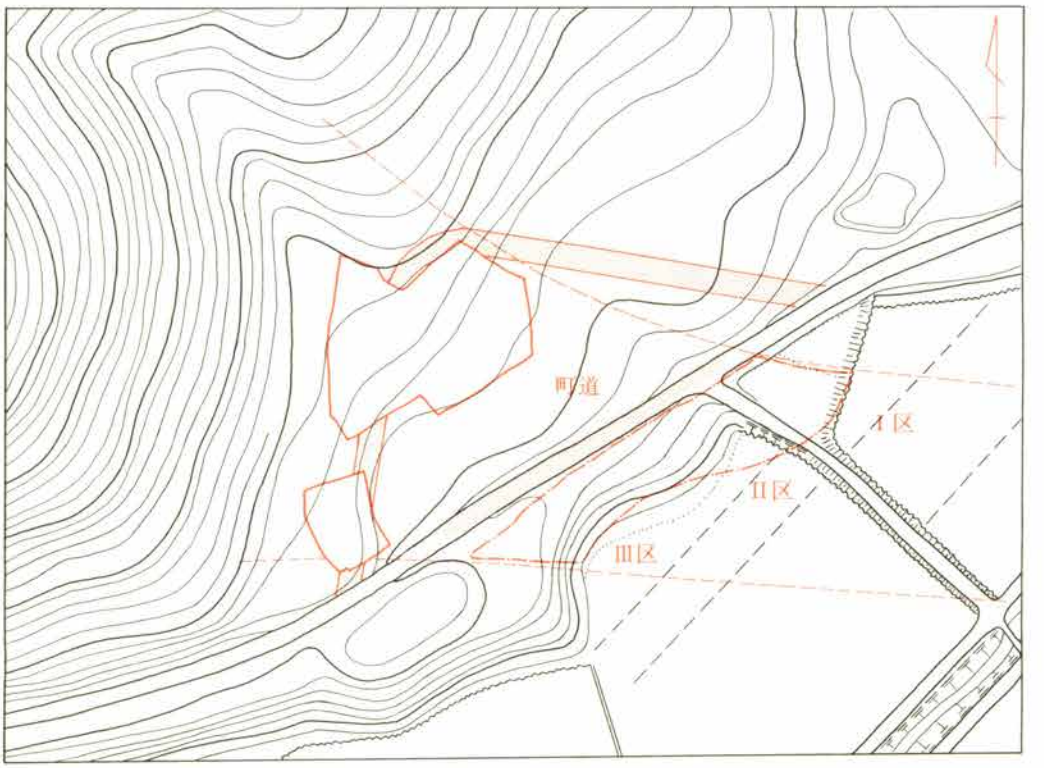
平成５年度実施された第２次調査は、町道を挟んで北側約1,300㎡を対象に行われた。調査範囲は、第１次調査中のトレンチ調査で約1,600㎡が遺跡の範囲と認定されたが、その資料を基に現地調査前に広めに設定した。しかし、重機による表土掘削作業中の状況から、遺跡の広がりはそれほど広範でないと判断したため、実際の調査範囲は縮小することとなった。結果的にはその判断は誤っており、若干の遺構が調査区外へ伸びていたが、それらは未調査のまま終わっている。

調査区は谷地形の開口部周辺にあたり、黒褐色土が厚く堆積していたため、地山質の黄褐色土が混ざり始めるあたりまで重機によって掘り下げたが、その面で検出できたのは黒色の腐食土を覆土に持つ近代以降のものらしい溝２条のみであった。それらは表土直下から検出されたが、現在使用されている溝に続くため掘り下げた。遺構精査を実施し、まず北方部で中世以降の溝状遺構を検出し、調査した。その後対象を南方部に移し、谷のライン上に伸びる溝状遺構を調査していたところ、地山を垂直近く切り込んで造られた平坦面であることが判明した。その広がりを捉えるとともに層序の確認をするため、トレンチを三箇所設けた。結果、平坦面は思いの外広がりを見せ、しかも一面にとどまらないことが確認された。このことは、それまでさほど遺物が出土せず、遺構密度が低いと予想していた担当者を驚かせた。また、それぞれのトレンチから須恵器坏蓋の完形品、双耳瓶のまとまった破片、焼土坑等が確認され、遺構・遺物が少ない中で、トレンチの的中率は大なるものであった。第一面から順次調査し、第二～四面へと掘り下げていった。恐らく、トレンチ調査を行っていなければ、一面の調査で終わっていただろう。結果的には分断された遺構もあり、反省材料もあるが、土層確認の必要性を改めて認識した。

調査日誌（抄）

４月21日（水）晴れ	七尾土木事務所担当者と現地協議。
５月７日（金）晴れ	調査範囲の確認及び設定。調査区を東側と西側の２区に分ける。
５月10日（月）雨	プレハブ建設及び重機による表土掘削（～12日）。
５月11日（火）晴れ	グリッド設定作業（～18日）。
５月12日（水）晴れ	表土掘削完了状況写真撮影。
５月18日（火）曇り後晴れ	発掘器材搬入。
５月19日（水）曇り後晴れ	本日より地元作業員参加。東側調査区の遺構検出作業を行う。
５月20日（木）晴れ	調査区範囲の略図を作成。溝状遺構の調査開始。
５月21日（金）晴れ	ＳＤ07を調査し、珠洲焼片とともに集石を確認する。
５月24日（月）曇り後晴れ	遺構配置略図を作成。
５月25日（火）晴れ後曇り	ＳＤ05を調査し、須恵器坏底部片が出土。
５月26日（水）快晴	調査区を東西に断ち割り、遺構面の層序を確認した結果、耕作溝は平坦面から切り込んでいることが判明。
５月27日（木）快晴	耕作溝の調査中、その下層から土師器出土。

5月31日（月）晴れ	ＳＤ08を調査し、須恵器横瓶の細片が多数出土。
6月1日（火）晴れ	ＳＤ08の土層断面図作成。
6月2日（水）曇り	平板測量。
6月3日（木）曇り	木根処理を行う。
6月7日（月）晴れ	ＳＤ11、13を調査し、それに直交する耕作溝を検出した。
6月8日（火）晴れ	耕作溝の検出状況を写真撮影後調査。
6月11日（金）曇り後晴れ	谷部の平坦面に堆積する灰色シルトを除去した。
6月14日（月）曇り時々雨	ＳＤ08を平坦面と認識し、ＳＸ01と改名。アゼとトレンチを境にＳＸ01をⅠ～Ⅴ区に分割。Ⅲ区谷寄りで東海系高坏出土。
6月16日（水）曇り	ＳＸ01全景を写真撮影。西側調査区の調査を開始。
6月17日（木）快晴	ＳＸ01のトレンチから須恵器坏蓋が完形で出土。
6月18日（金）曇り後晴れ	浅い溝状のＳＸ02を検出し調査。
6月21日（月）曇り	西側調査区の平板測量。
6月22日（火）曇り後晴れ	ＳＸ03から切り込むＳＫ09より須恵器坏身出土。
6月25日（金）快晴	トレンチの土層断面図作成。
6月28日（月）曇り	アゼはずしを行う。
6月30日（水）曇り	最終日。平板測量図にレベルを入れる。発掘器材撤収。



第１次調査区　第２次調査区　工事立ち会い部分　道路工事範囲

第２図　調査区位置図（Ｓ＝１／1,500）

第３章　調査の概要

第１節　地　　形

丘陵の谷開口部にあたり、現況は雑木林及び杉の植林地であった。表土掘削後の標高は北が約30m、南が約25.5mで、谷奥で多少傾斜がきついほかは緩やかに南に開いた地形である。また、現在は杉植林時の造成のためか確認されないが、調査区東端に小規模な谷地形が検出された。

第２節　調 査 区（第３図）

大きくは中央谷部から東を東側調査区とし、西側に広がる平坦面を西側調査区とした。区割りは第１次調査に倣い、南→北をアルファベット、東→西をアラビア数字で表し、東南隅の杭名をグリッド名とした。杭は第１次調査時のＯ－17杭を基準にして８ｍ間隔で設置したが、グリッドは前年度同様に４ｍ四方で設定したため、杭番号はアルファベット、アラビア数字共に一つ飛ばしになっている。

また、ＳＸ番号を付けた平坦面については、トレンチ、アゼを境に南西からＩ区～Ｖ区の名称を付している。

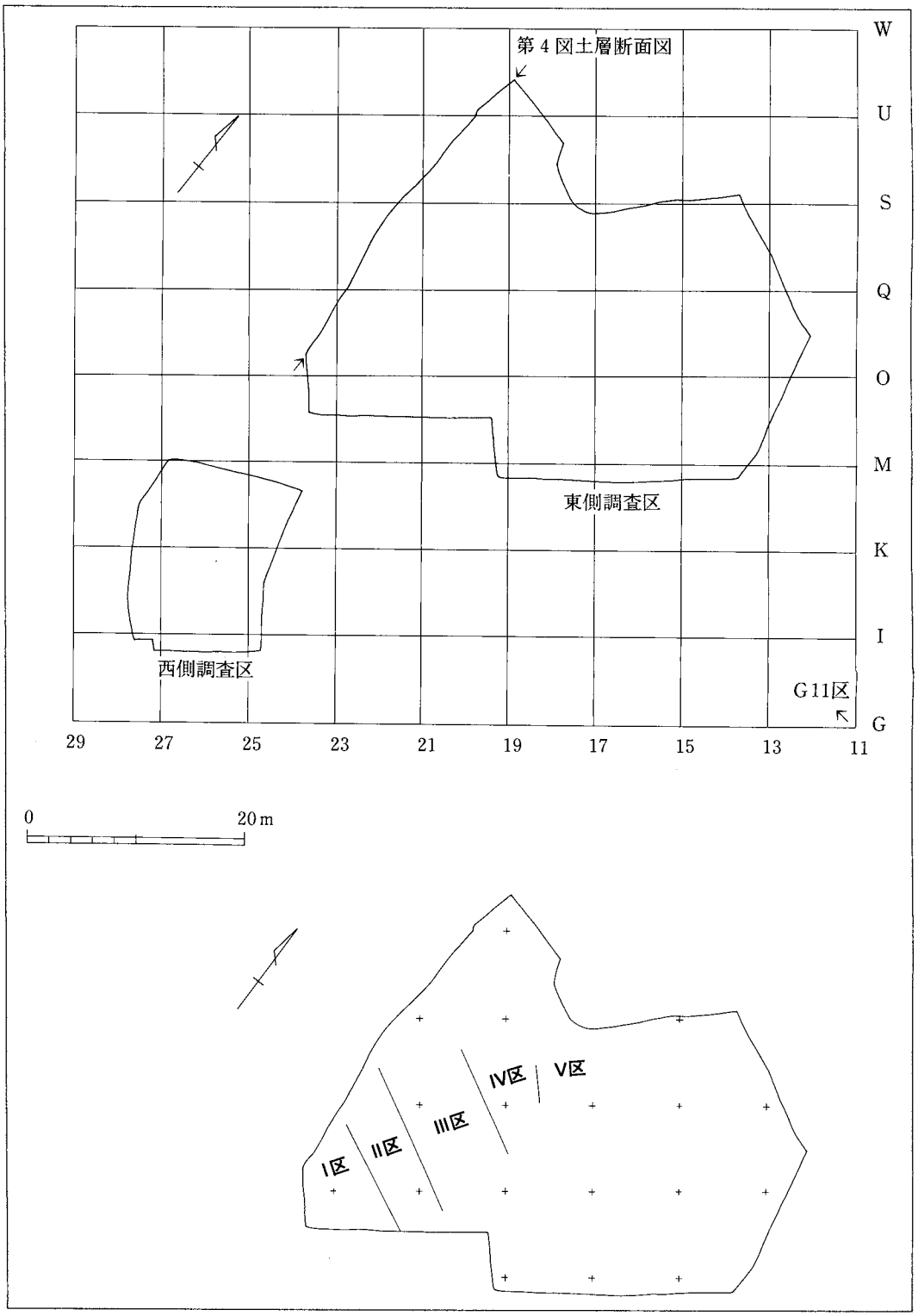
第３節　層　　序（第４、10図）

基本層序の観察は、谷部は東側調査区の西壁面（第４図）、平坦面はトレンチ（第10図）で行った。

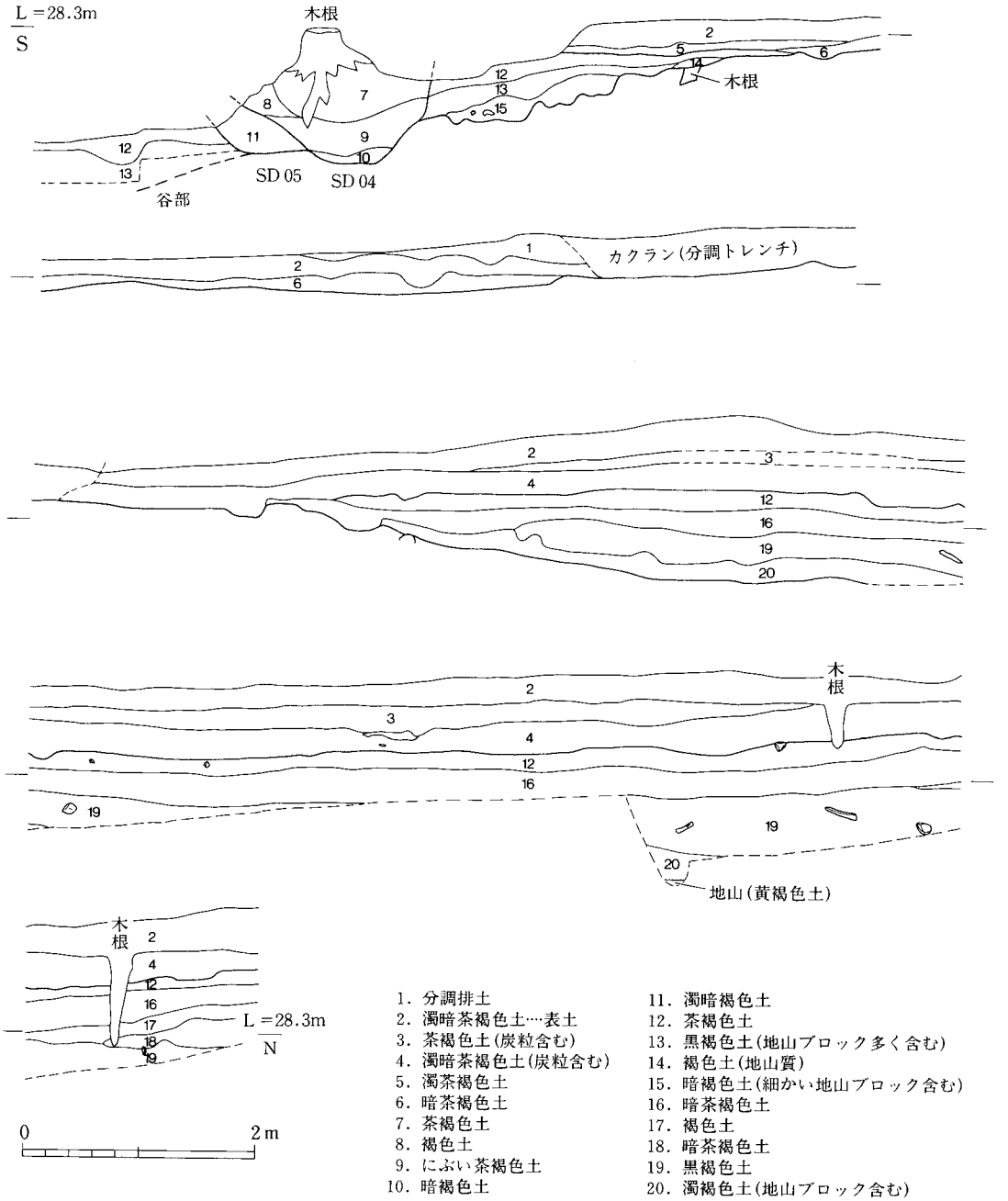
谷部には黒褐色土が厚く堆積しており、一部重機で深掘りし、地山面を検出した。第１層は分布調査時の排土、第２層は表土である。第12層の茶褐色土が一つの鍵層であり、この面より上は近世以降、下は中世以前と考えられる。第15層は古代の包含層である。第12～14、16～20層は自然の谷地形の堆積土であり、時期は不明である。

平坦面部分に関しては、表土から遺構検出面については重機で掘削を行ったため明らかでない。第３、４、６層は古代の包含層であり、８世紀後半～９世紀前半の土器が出土している。第４層は溝状の凹地、第４層は耕作溝の堆積土である。何れも黄灰色シルトの堅く締まったものであり、同時期の耕作溝は全てこの土が堆積する。第７、８、10層は５世紀後半～８世紀前半の包含層であり遺構面が三面検出された。第11～14層は遺物は出土していないが、それ以前の堆積層である。

なお、第１次調査区の基本層序との対応関係は不明である。



第3図　グリッド図及び平坦面区画図（S＝1／600）



1. 分調排土
2. 濁暗茶褐色土…表土
3. 茶褐色土(炭粒含む)
4. 濁暗茶褐色土(炭粒含む)
5. 濁茶褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 褐色土
9. にぶい茶褐色土
10. 暗褐色土
11. 濁暗褐色土
12. 茶褐色土
13. 黒褐色土(地山ブロック多く含む)
14. 褐色土(地山質)
15. 暗褐色土(細かい地山ブロック含む)
16. 暗茶褐色土
17. 褐色土
18. 暗茶褐色土
19. 黒褐色土
20. 濁褐色土(地山ブロック含む)

第4図　谷部基本土層図（S＝1／60）

第４章　遺構と遺物

第１節　東側調査区

当区では、古墳時代・古代の耕作溝・土坑、中世以降の溝状遺構等を検出し、須恵器、土師器、珠洲焼等が出土している。

ＳＤ01（第６、７図）

幅約70cm、深さ約16cmの北東－南西方向に走る溝状遺構であり、底面に幅30～40cm、深さ15cm前後の楕円形をしたピットをほぼ等間隔に持つ。南西部はピットのみしか残存しないが、おそらく溝状につながっていたものと思われる。こうした遺構は第１次調査でも検出されており、道状遺構として報告されている。硬化面は見受けられないが、同様に道としての使用が考えられる。中世以降のものと考えている。

遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ02（第６、７図）

北東－南西に走り、幅60～160cm、深さ20cm前後だが、南西部に行くに従って浅くなり、ついには追えなくなる。東部底面には楕円形で幅25～50cm、深さ10cm程度のピットがほぼ等間隔に並ぶため、ＳＤ01と同様の機能が考えられる。

遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ03（第６、７図）

幅100cm前後、深さ10cm前後を測り、南西－北東方向に走る浅い溝である。

遺物は出土していない。

ＳＤ04・05（第６、７図）

ともに幅約80cm、深さ約30cmを測り北東－南西方向に走る。実際にはより上面で検出しており、幅、深さともにもっと大きかったはずである。ともに最下層に地山混じりの濁黄褐色土が堆積するが、堅く締まるという印象は受けない。ＳＤ05を切り直したのがＳＤ04であり、同一機能を持った溝と考えられる。現在調査区周辺に存在する溝と規模、方向を一にしている。それらは植林地の作業用通路、排水を兼ねていると思われ、それと同様の機能が考えられよう。

遺物はＳＤ04から近世以降の擂鉢の小片が出土しているほか、５の須恵器坏が出土している（後述）。ＳＤ05からは土師器片と鉄釘片が出土している。

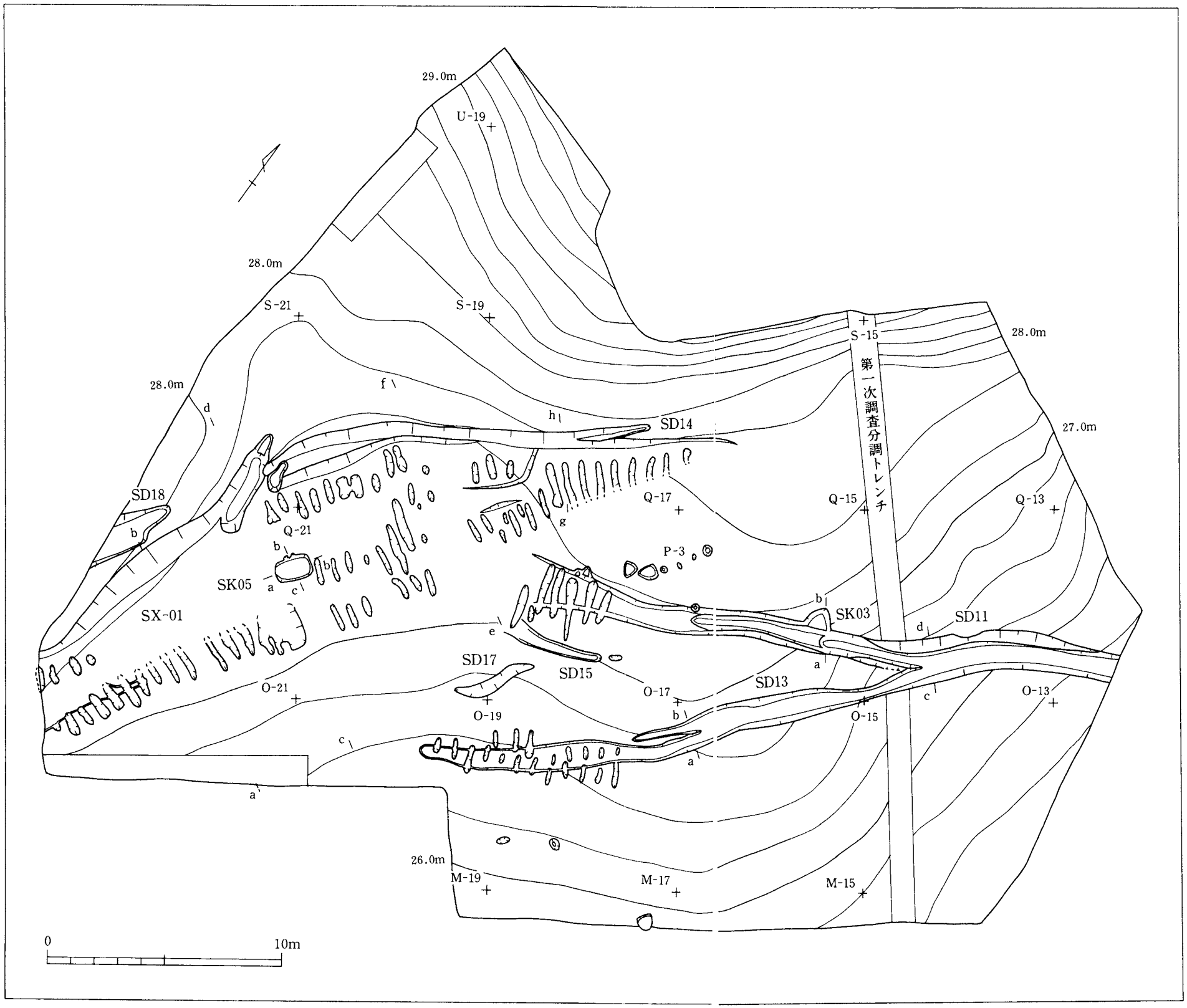
ＳＤ06（第６図）

幅約35cm、深さ約５cm、長さ230cm程の南北に走る浅い溝である。

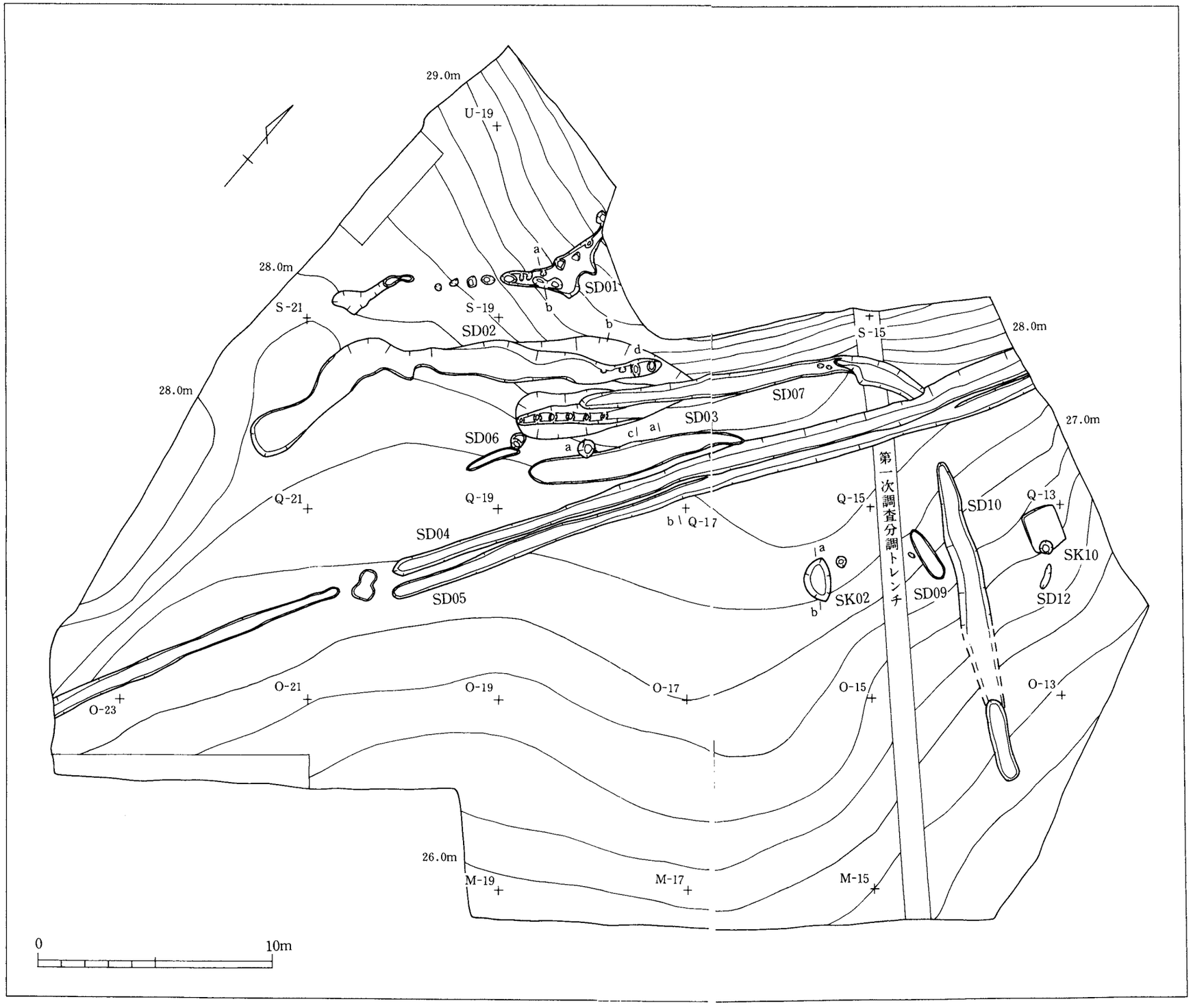
遺物は出土していない。

ＳＤ07（第６、８図）

幅約100cm、深さ10～20cmを測る。斜面を切って作られているため、溝底面は南東側に緩やかに傾斜している。南西部には幅30cm、深さ５cm程度の円形ピットが等間隔に並ぶ。その東側には



第５図　東側調査区遺構配置図　中世以前（S：＝１／200）



第６図　東側調査区遺構配置図　中世以降（Ｓ ＝１／200）

15～30cm大の石の集中が見られた。石周辺は溝というよりは平坦面をなしている。石は散乱していたが、当初はもっと整然と並べられていた可能性もある。ＳＤ02によって切られた際に散乱したものと思われる。集石の下にピット等は確認できなかったが、付近から珠洲焼の細片が出土しており、中世の墓地であった可能性もある。そうした場合、ＳＤ07は墓道ということになろう。

ＳＤ09（第６図）

幅約60cm、深さ８cm、長さ230cm程の北西－南東に走る浅い溝である。

遺物は出土していない。

ＳＤ10（第６、12図）

幅70～120cm、深さ７～25cmを測り、北西－南東方向に走る。等高線に直角に走るため、排水用と思われる。ＳＤ11との交点に赤子頭大の礫が入れられていた。

礫の間から１の珠洲焼片と磁器の瓶類が出土している。１は底径11.0cmで静止糸切り痕を持つ。色調は内外とも灰色を呈し、焼成はやや甘い。球胴型の小壺の底部と思われるが時期は不明である。磁器は図示しなかったが近世以降のものだろう。

ＳＤ11・13（第５、７、12図）

ＳＤ11は幅100～160cm、深さ20～50cmを測り、東西に伸びるが西端ははっきりしない。ＳＤ13は11から二股に伸びたものであり、幅50～100cm、深さ10cm弱である。分岐点での土層観察では、最下層が同一であり、ほぼ同時期に作られたものと推定した。ＳＸ01面の耕作溝を切っており、それより後出のものである。

遺物はＳＤ11から須恵器が二点と土師器片、ＳＤ13から土師器片が出土した。２は須恵器大甕の胴部下半付近の破片である。Ｏ－14区の下層から出土した。青味がかった灰色でよく焼き締まり、胎土・質感はＳＸ01の５に類似し、海綿骨針を少量含む。内外面には粗い平行タタキ（アテ具）痕が残る。外面は溝底に細かな斜行する柾目状の木目があるが、内面のそれには確認できない。時期は内面平行アテ具が一般化する９世紀後半～10世紀前半頃のものだろう。もう一点は図示しなかったが、Ｏ－14区上層から須恵器無台坏の底部片が出土している。底体部屈曲部付近の形態からみて９世紀後半頃のものとみられる。

ＳＤ12（第６図）

幅25cm、深さ５cm、長さ100cmで南北に走る。

遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ14（第５図）

幅40cm前後、深さ10cm前後を測るが、ＳＸ01に切られており、全形は不明である。

遺物は土師器の甕が40点程出土しているが、接合せず全形は明らかでない。

ＳＤ15（第５図）

幅35～60cm、深さ15cm前後を測るが西方ははっきりしない。

遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ16（第13図）

幅約30cm、深さ約20cmを測り、北東－南西方向に走る。ＳＸ01の面から掘り込まれており、耕

作に伴うものと思われる。覆土はＳＸ01面に存在する耕作溝と同一の黄灰色シルトである。

ＳＤ17（第５図）

幅約50cm、深さ約５cmを測り、北東－南西方向に走る。

遺物は出土していない。

ＳＤ18（第５図）

幅60cm程の浅い溝状のくぼみであり、調査区外へ伸びている。

遺物は出土していない。

ＳＫ02（第６、９図）

長径180cm、短径115cm、深さ約20cmの楕円形を呈する土坑である。覆土上層に炭塊と焼土ブロックを含むが壁は焼けていない。

遺物は出土していない。

ＳＫ03（第５、７図）

ＳＤ11によって切られているため全形は不明であるが、残存する部分で径115cm、深さ８cm程である。

遺物は出土していない。

ＳＫ05（第５、９図）

160cm×95cm、深さ20cm弱の長方形を呈する焼土坑である。最下層には炭が堆積している。側壁が赤くしっかりと焼けているのに対し、底面は黒色で堅く締まるのみである。ＳＸ01の面から掘り込んでおり、８世紀後半頃のものと思われる。

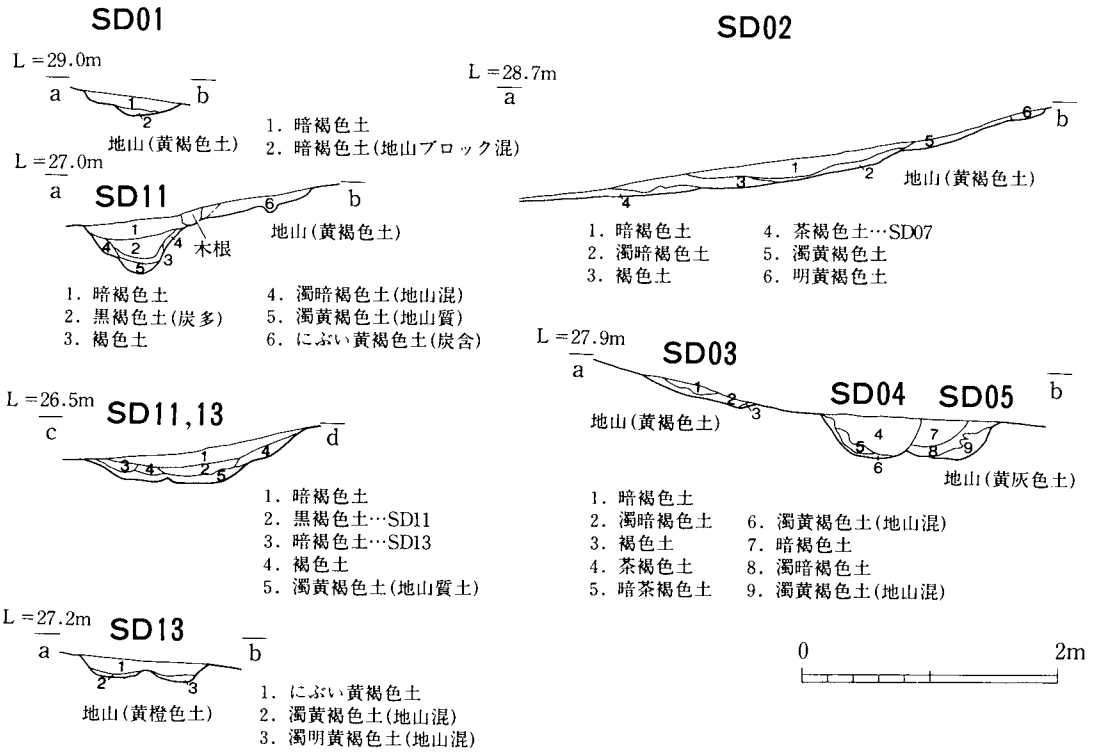
遺物は土師器片が出土している。

ＳＫ09（第９、12、13図）

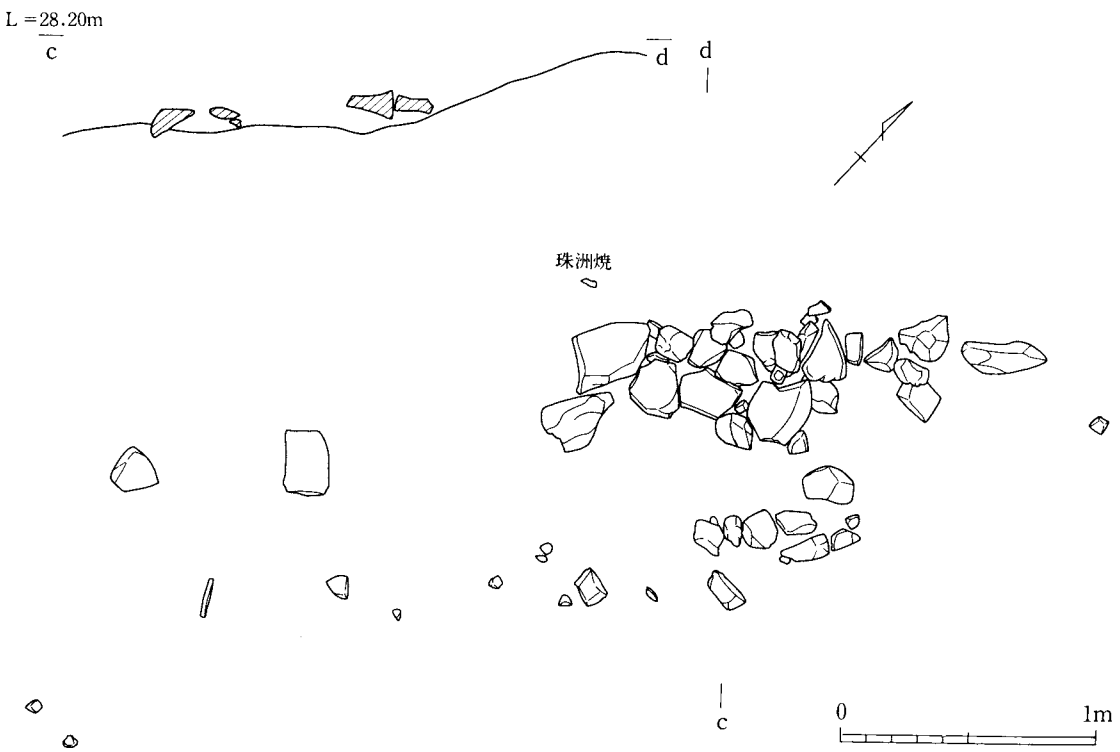
ＳＸ03から掘り込まれた浅い土坑である。プランははっきりしないが、炭の分散する範囲、若干の落ち込みを図に示した。径30cm程の範囲で焼土面が見られ、その周りに炭が濃密に分布する。柱穴等は確認されなかったが、簡易な居住性を備えた機能も考えられる。

遺物は須恵器坏蓋、坏身が各一個体出土している。３は完形の坏蓋で、口径12.6cm、器高4.5cmを測る。やや青味がかった灰色で、堅く焼き締まり、天井部には降灰が認められる。天井部縁辺には別個体をのせて焼成した際に生じたとみられる自然釉の空白がある。胎土は均質な細砂を多量に含む砂っぽい質感を呈するもので、その他に１～２mm程度の石英・長石片が混ざる。器面には0.5～１mmの黒色粒の吹き出しがある。天井部外面は図示の範囲が、幅広の単位でロクロケズリ（ロクロ右回転）されている。内面中央部にはロクロナデの下に同心円文の叩き痕が確認できる。４は坏身で約20点の破片となって出土した。口径11.2cm、器高5.7cmを測る。オリーブ色を帯びた灰色で、焼成はやや甘い。胎土は均質な多量の細砂をベースに、１～３mmの石英・長石片を含み、大粒の砂礫の中では乳白色の長石が比較的目立つ。海綿骨針を少量含んでいる。底部には蓋同様、幅広の雑なロクロケズリ（ロクロ右回転）を施す。

３と４は蓋身セットとして使用された可能性もあるが、口径が合わず、蓋は身の受け部にきっ



第７図　溝状遺構土層断面図（Ｓ＝１／60）



第８図　ＳＤ07 集石（Ｓ＝１／30）

ちり収まらない。ともに５世紀末～６世紀初頃の所産である。

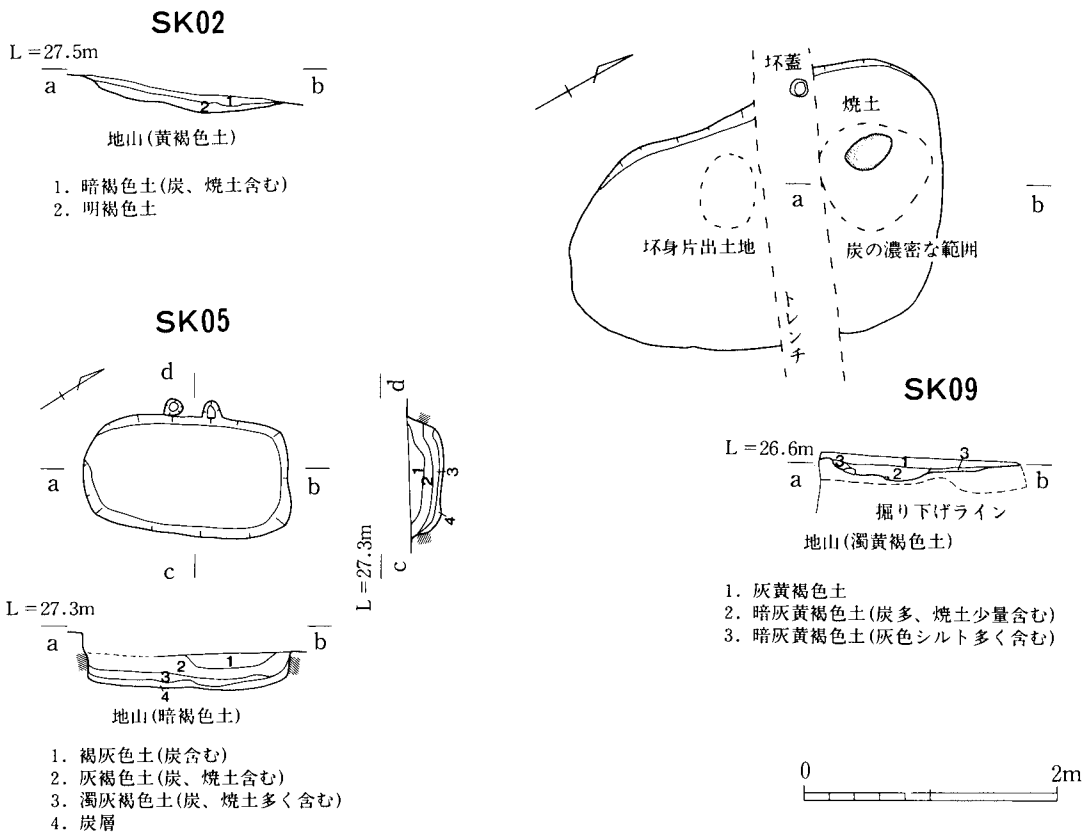
ＳＫ10（第６図）

150cm四方の方形で、深さは10cm前後である。下層に多量の炭が混ざり、近世以降の炭焼きに関連するものであろう。

遺物は出土していない。

ＳＸ01（第５、10、11、12、13図）

当初は黒色土が溝状に堆積していたためＳＤ08としていたが、断ち割りを入れた結果、谷を切り込んだ大規模な平坦面を造成していることが判明した。地点によって多少の差はあるものの、使用面直上には、灰色系シルトが堆積し、遺物の出土もこの層からが多い。この面にはＳＤ16、ＳＫ05のほか、幅20～30cm、長さ50～200cm、深さ５～10cmの耕作用と思われる溝が70以上掘られている。それらの溝は北西－南東方向に伸びるもの（Ａグループ）とほぼ南北方向に伸びるもの（Ｂグループ）の二グループがあり、時期的な差、或いは耕作区の違いを示すものと思われる。両グループが重なることはないため、後者の可能性が高い。一部を除き、ほぼ等高線に直行する。溝の覆土は全て堅く締まった黄灰色シルトである。



第９図　東側調査区土坑（Ｓ＝１／60）

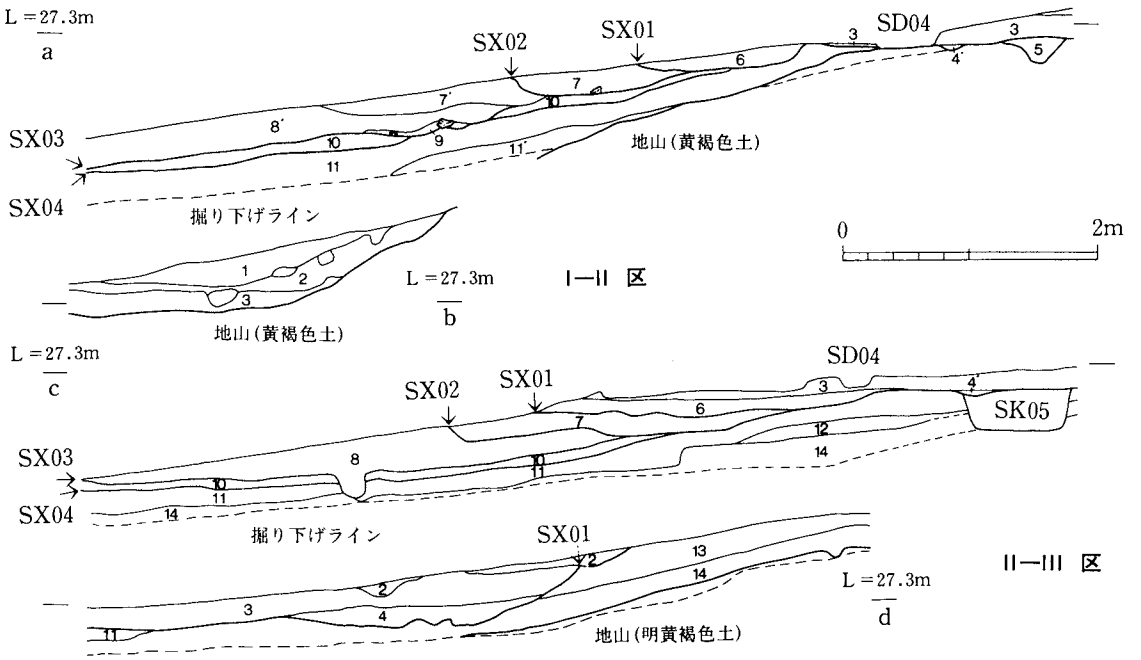
遺物は須恵器を中心に出土している。5は口径11.6cm、器高3.7cmを測る小型の須恵器有台坏である。底部片がR－14区のSD04から出土し、口縁部二片はG－19区とO－20区の包含層（SX01上面）から出土した。灰色で焼き締まりが良く、胎土には多量の均質な細砂を含む。2mm以上の砂礫は少ないが、石英と長石のかみ合ったものが認められる。細かな黒色粒の吹き出しがあり、SK09出土の3と類似した質感がある。時期は8世紀後半（第3四半期）である。6は口径11.8cm、器高3.6cmの小型の須恵器有台坏である。13点の細片となっており、P3から小片一点が出土したほかは、Ⅱ区灰色土下層からの出土である。青味がかった灰色を呈し、焼成は良い。胎土には2mm以上の長石が含まれており、総じて5との類似性が認められる。時期は8世紀後半である。7は口径約14.5cmの須恵器無台坏である。うすいオリーブ灰色を呈し、焼きは甘い。1.5mm程の石英粒を少量含むが、0.5mm前後の細砂は少ない。断面には白色粘土を挟む薄い縞構造が発達する。器肉は極めて薄い。時期は10世紀前半である。Q－20区灰色系シルト上層からの出土であり、SX01埋没後に入り込んだものであろう。8はⅣ区の灰黄褐色土層から出土した須恵器双耳瓶である。色調は淡い青灰色で焼成は良い。胎土は均質な細砂のほか、2mm以上の長石を僅かに含む。底部は白色の薄い水平な縞構造が発達する。断面はやや光沢を持つ。海綿骨針は確認できないが、長径7mmのスポンジ状の海綿塊一点を含む。外底は切り離し技法を伴わず、ロクロ台の痕跡を残す。側底部は板状工具によるロクロケズリ状の面調整を行う。時期は9世紀後半である。9はO－22・23区の上面黒色土から出土した須恵器の横瓶口縁部である。オリーブ灰色を呈し、焼成は自然釉を帯び良く焼き締まっている。胎土には2mm以上の石英・長石を含む。10は須恵器の横瓶で、破片はⅡ区の灰色土下層（92／133片）を中心に出土した。破片は非常に細かく、更に破断面も不規則に小さく割れており、廃棄後、耕作等の影響をかなり受けたとみられる。推定胴部幅約29cm、胴部高約20cm、口頸部基部径9.5cmを測る。色調は青味を帯びた灰色、焼成は良好で火前側には自然釉がつく。胎土は2mm以上の石英・長石を含むもので、素地は滑らかな質感がある。なお、この横瓶は図示の通り、閉塞円盤を左右両側に持つ特殊なものである。時期は8世紀後半とみられる。本例の製作工程については、器形の遺存率が低く観察が困難であった。焼成は自然釉の付着状態から、通有のとおり、直立（右－口縁部側を下に）して窯詰めされており、火前には口頸部側面が向いていたようである。11はⅣ区の一段低くなった部分の上層から出土した製塩土器である。棒状尖底形の底部で、内底面の残存部は平坦面をなす。色調は淡黄橙色を呈し、胎土には0.5mm前後の細砂、海綿骨針を多量に含む。

12はQ－21区灰色系シルト下層から出土した鉄製の角釘である。残存長4.7cmであり、頭部を直角に折り返す。

13はⅢ区灰色系シルト下層から出土した打製石斧の刃部である。刃部は丸刃にととのえる。最大幅5.8cm、最大厚1.0cmであり、摩滅が激しく、調整痕は明瞭ではない。一部に研磨面がある。石材は凝灰岩系である。

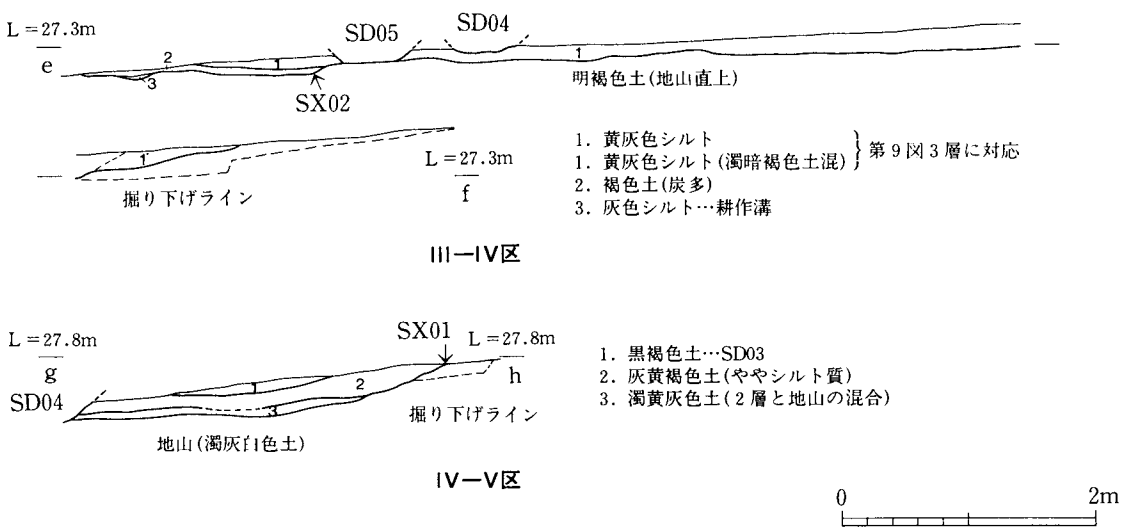
SX02（第13、14図）

平坦面というより、幅広で浅い溝に近い。幅25cm前後、長さ80cm程度の南北方向に近い耕作溝が数条と、ピットが数個掘られている。



1. 黒褐色土
2. にぶい黄褐色土
3. 灰黄色シルト
4. 黄灰色シルト(鉄分多く堅く締まる)
4. 黄灰色シルト……耕作溝 } 同一？
5. 褐色土
6. にぶい黄褐色土(炭 少し含む)
7. 灰黄色シルト
7. 灰黄褐色土(ややシルト質)
8. 黄褐色土(炭 少し含む)
8. 暗黄褐色土(灰色シルトを多く混)
9. 灰色シルト(暗褐色土混、炭多量)…須恵器蓋坏出土
10. 濁暗褐色土(黄褐色土混、炭やや多)
11. 濁黄褐色土(明黄褐色土塊混、炭少)
11. にぶい黄褐色土(炭少し含む)
12. 灰黄色シルト(鉄分含む)
13. 黄褐色土
14. 濁暗褐色土

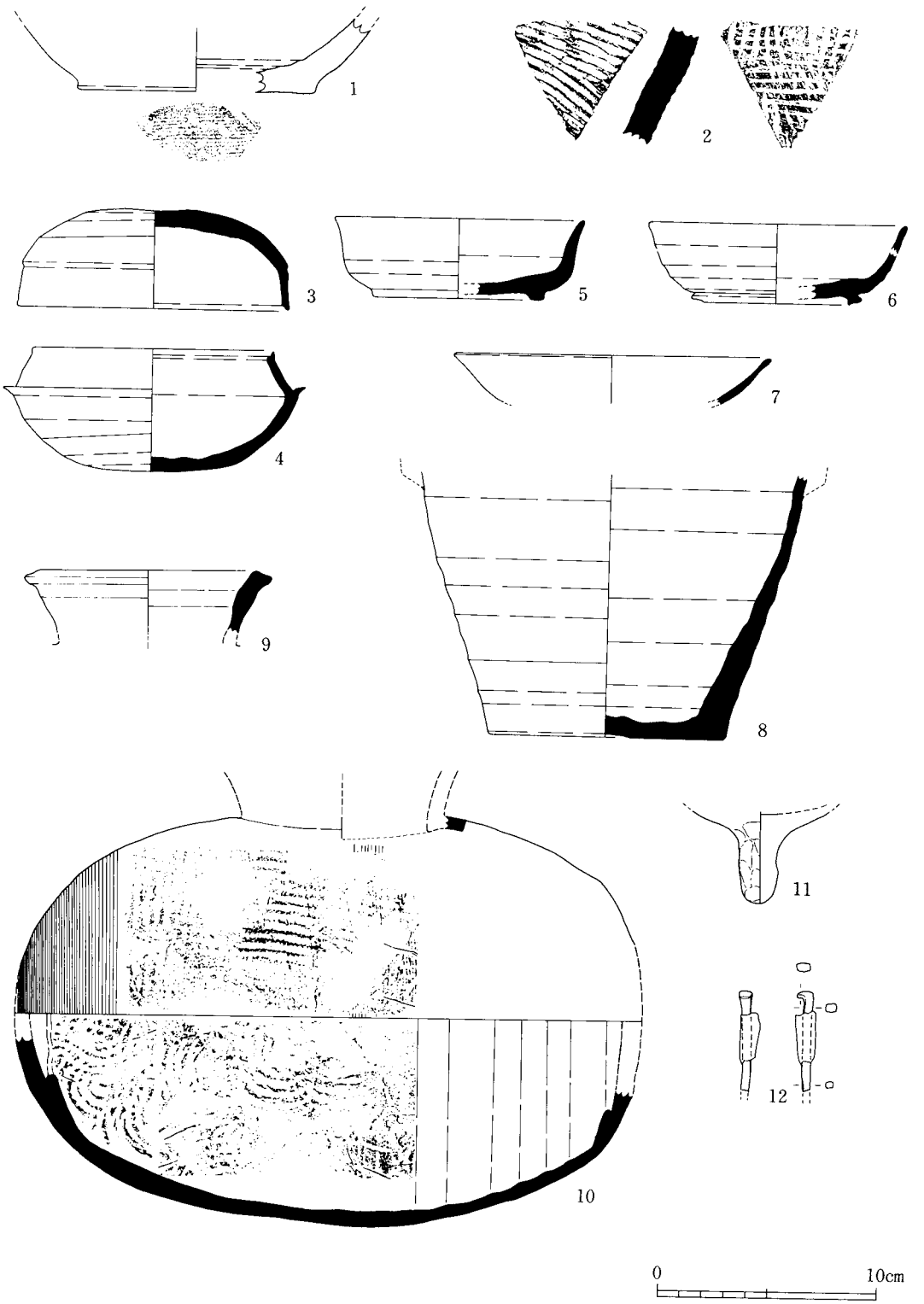
第10図　ＳＸ01～04　Ⅰ－Ⅱ区、Ⅱ－Ⅲ区土層断面図（Ｓ＝１／60）



1. 黄灰色シルト
1. 黄灰色シルト(濁暗褐色土混) } 第９図３層に対応
2. 褐色土(炭多)
3. 灰色シルト…耕作溝

1. 黒褐色土…SD03
2. 灰黄褐色土(ややシルト質)
3. 濁黄灰色土(２層と地山の混合)

第11図　ＳＸ01～02　Ⅲ－Ⅳ区、Ⅳ－Ⅴ区土層断面図（Ｓ＝１／60）



第12図　出土遺物実測図（S＝1／3）

14はⅢ区西半の最下層から出土した土師器小甕である。ＳＸ03として取り上げた破片も多く、層位の認識に混乱があった可能性がある。器面の残りが悪く、接合できないが、ほぼ一個分の破片が存在する。底部はやや厚みのある丸底である。外面は摩耗が著しいが、底部付近の破片に粗いハケ目が認められる。スス・コゲ等の使用痕は確認できない。橙色を呈し、胎土に目立つ砂礫は少ない。時期は特定しづらいが、最大でＳＫ09の段階から８世紀中葉の幅で捉えておきたい。

15はⅡ区上面を主体に出土した土師器長胴甕である。破片は一個体の半分程度は存在するとみられる。口縁部は緩やかに短く外反し、端部を丸くおさめる。底部は径約10cmの平底をなす。調整は底部、体部とも内外面をハケメとし、内面はその後に体部中位以上を平滑にナデる。スス・コゲ等は確認できない。淡黄橙色で胎土には0.5～1.0mmの均質な砂粒を極多量含む。時期は全形が不明のため、14同様の幅の中で考えておきたい。

ＳＸ03（第13図）

調査区南端にかかる平坦面である。全容は明らかでないが、大規模なものではない。ＳＫ09と幅20cm前後、長さ40～100cmの耕作溝が数条、ピットが数個が確認された。

遺物は土師器片が出土しているが時期の決定に至るものではなく、遺構の年代観はＳＫ09出土の須恵器で捉えておきたい。

ＳＸ04（第10図）

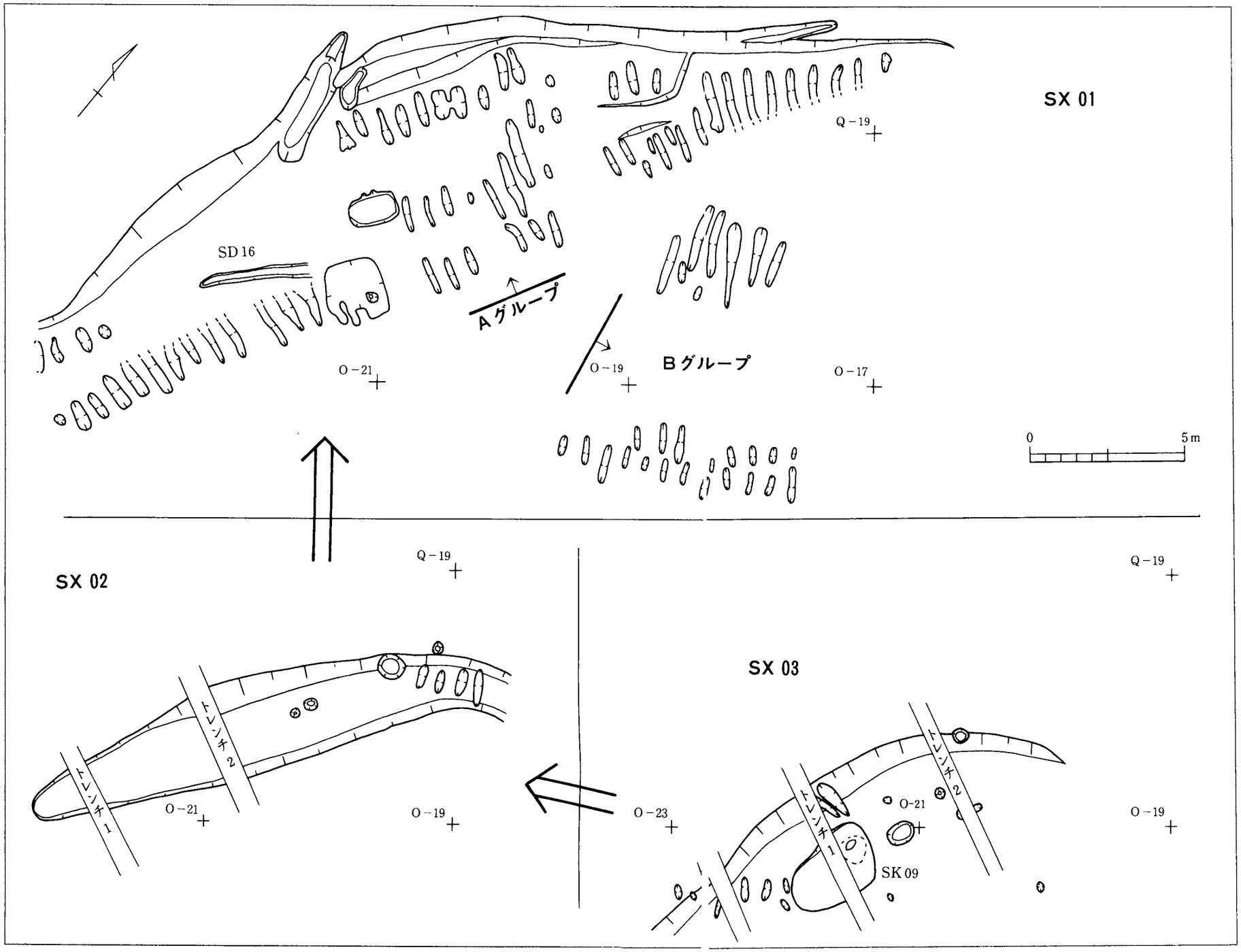
土層断面でのみしか図示していないがＳＸ03の下層に広がる面である。耕作溝状のもの、ピットが各一つあるのみである。

遺物は土師器片が出土している。時期は不明であるがＳＸ03の年代をそれほど溯るものではないだろう。

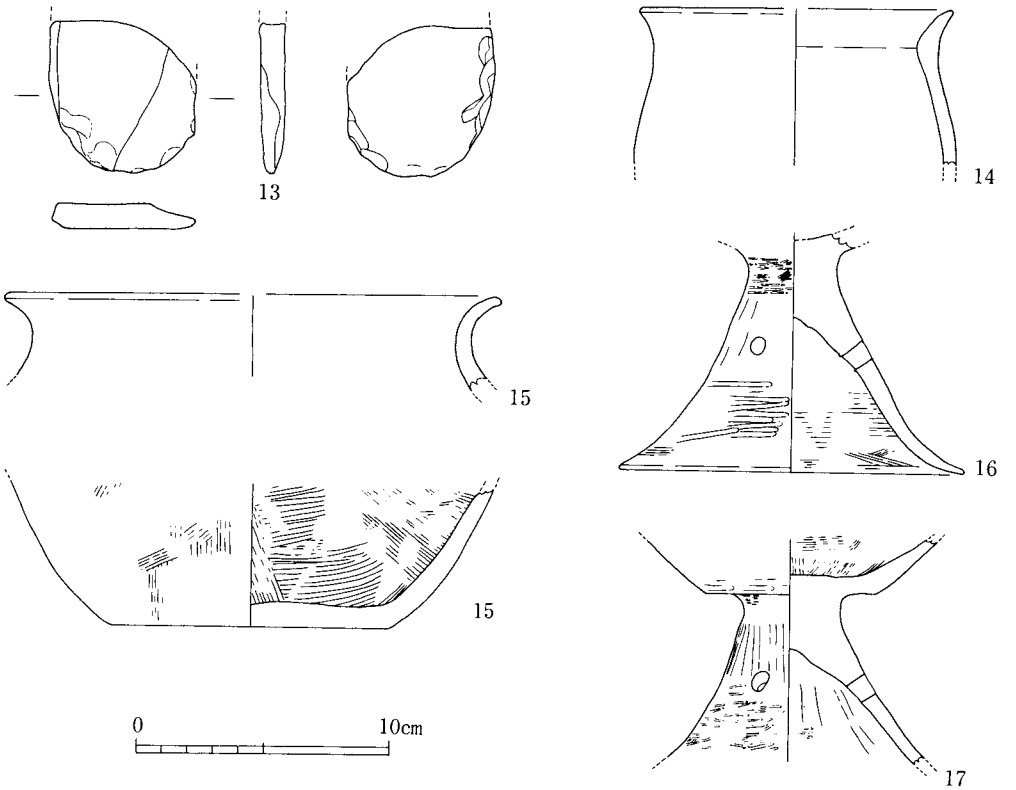
その他（第14図）

遺構としては検出できなかったが、Ｑ－20区の谷部自然堆積の濁暗褐色土（第10図第14層）より、古墳時代前期の土師器高坏形土器等の破片がまとまって出土した。16、17は同一器形になるとみられ、ともに広義の東海系高坏形土器である。16は脚部径13.5cmである。二点とも器面は赤みを帯びたうすい橙色で、胎土中には１～２mm前後の石英・長石片を普通程度に含み、1.0mm以下を主体とする赤褐色粒を多量に含む。脚部が東海系本来の内湾したものではなく、大きく外反すること、脚基部と裾部に細かい横ミガキを施すこと、坏部内面にハケメを残すことを特徴とする。これらの点から、同系譜の高坏の中でも新相を示すものであろう。

また、ＳＸ02周辺からは甕形土器、壺形土器の破片が出土しており、器形からの時期は特定できないが、ほぼ同時期のものの可能性がある。



第13図　ＳＸ01～ＳＸ03平面図（Ｓ：＝１／150）



第14図　出土遺物実測図（S＝1／3）

第2節　西側調査区

当区は東側に緩く傾く平坦面をなしていたため、建造物の存在を予想していたが、古代のものと思われる土坑を検出したのみであり、遺物の出土もなかった。

ＳＫ06（第15、16図）

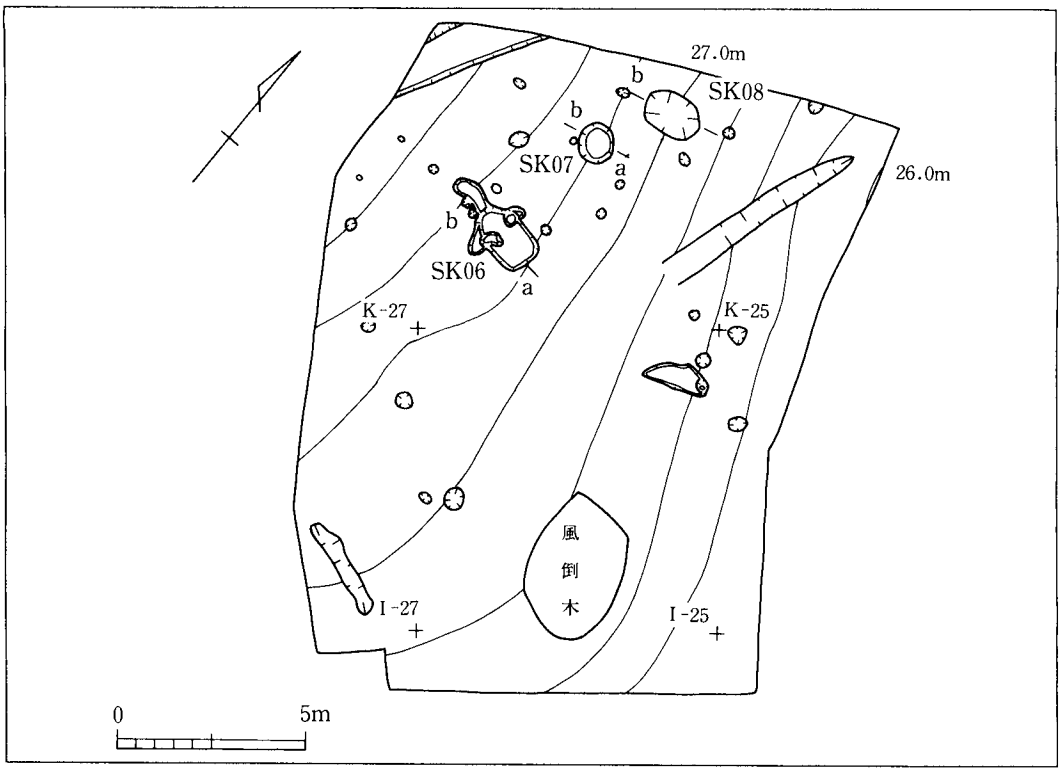
長径約160cm、短径約110cm、深さ12cm程の長方形で、覆土に炭と大粒の焼土塊が混ざる。ＳＫ05ほどではないが、側壁がかすかに焼ける。

ＳＫ07（第15、16図）

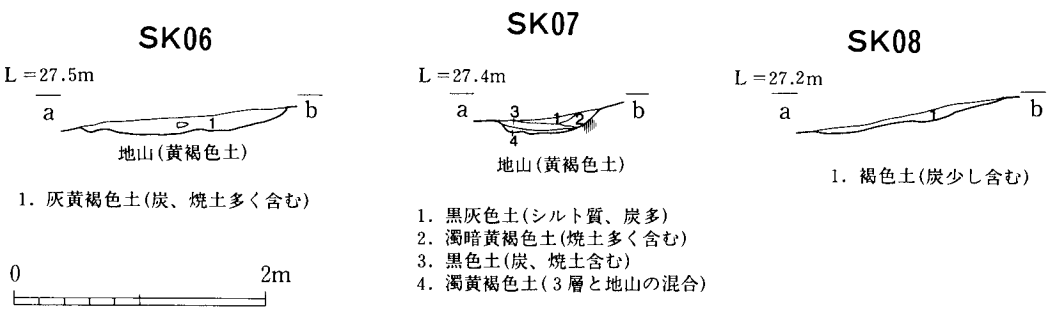
径80cm、深さ10cmの略円形で覆土に炭と焼土塊を含む。ＳＫ06同様に側壁が弱く焼ける。

ＳＫ08（第15、16図）

長径約145cm、短径約100cm、深さ５cm前後で浅い隅丸長方形を呈する。覆土に少量の炭を含むが側壁は焼けていない。



第15図　西側調査区遺構配置図（S＝1／200）



第16図　西側調査区土坑（S＝1／60）

第３節　遺物の検討

今回の調査の出土遺物は、遺跡の性格を反映し、コンテナ２箱と非常に少ないが、ここではその中からＳＫ09出土須恵器蓋杯とＳＸ01出土須恵器横瓶のふたつを取り上げて派生する問題について検討してみたい。

１．能登の須恵器生産の開始期とその編年的位置付けをめぐる諸問題

ＳＫ09出土の須恵器杯蓋と杯身は、第１節に記された胎土の特徴を有し、７世紀初頭～８世紀代の鳥屋窯産須恵器の胎土の１グループの特徴に合致しており、これを在地産と考える。

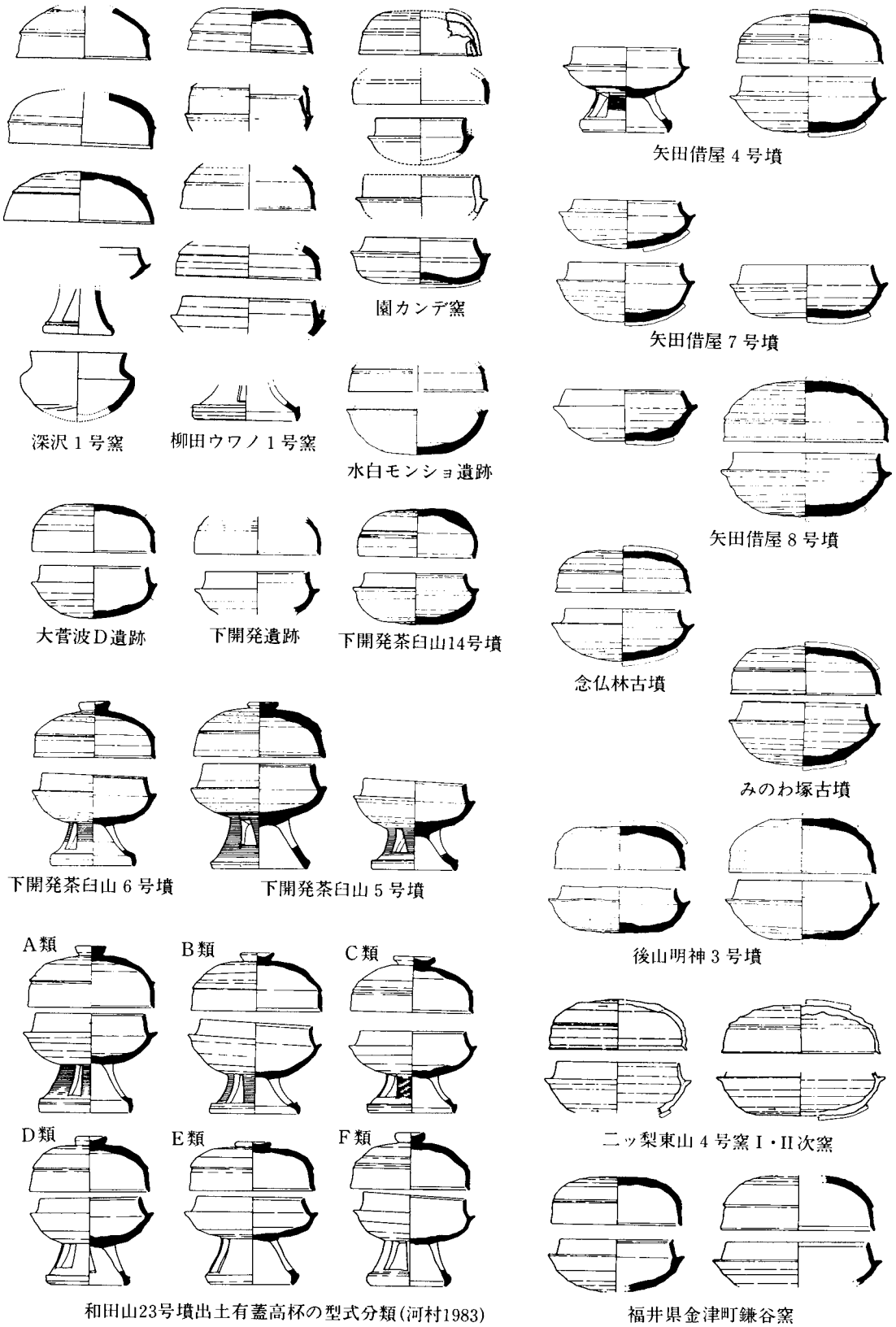
能登・越中の須恵器生産の開始　能登の須恵器生産の開始を示す資料としては、羽咋市柳田ウワノ１号窯（福島1982、宮下1992）が知られ、開窯時期は和泉陶邑窯のＴＫ47型式期に対比されている。これに若干後出するとされるものとして、鳥屋町深沢１号窯（浜岡他1965）、越中では氷見市園カンデ窯（西井他1988）がある。

能登の当該期の須恵器の編年研究は、現状では資料的制約もあって、蓋杯類の細部形態や法量変化に型式認定の指標をおかざるを得ない。柳田ウワノ１号窯採集品では、杯蓋で法量と稜形態から２群に細別され、法量が小さく（蓋口径12.0～13.0cm、口縁部高2.0～2.2cm）、シャープな作りのものが古相を示すと理解された。杯身は資料が少ないが口径約10.0～11.0cm。深沢１号窯採集品では逆に法量が大きいこと（蓋口径12.8～14.5cm）、器形的に新相を示す個体が含まれることを根拠にＭＴ15型式期に対比する考え方（木立1991）が示されている。器形についてはともに天井の高い形態を特徴とする。園カンデ窯は、蓋が12.0～13.0cm前後、杯身は口径10.5～11.0cm前後と小さい。器形は蓋身とも比較的偏平である。当該期のヘラケズリのロクロの回転方向は、陶邑窯ではＴＫ47型式を境に左から右に変わっていく（田辺1966）。前掲資料では、柳田ウワノ１号窯がすべて右回転、園カンデ窯は１点を除いて左回転という技法差がある。

本遺跡出土品の特徴は第１節の説明の通りであるが、蓋が口径12.6cm、器高4.5cm、身が口径11.2cm、器高5.7cmを測る。蓋は稜の表現があまく沈線状となっており、口縁部高は2.1cmと低い。器形は全体にやや偏平である。身は立ち上がりが内傾し、器高が5.7cmと非常に深い器形である。ロクロ回転はともに右である。身は鹿島町水白モンショ遺跡（山本他1989）出土品（第17図）が類似した特徴を持つ。

さて、問題はその型式認定と編年的位置付けであるが、現状ではともに資料的制約から保留せざるを得ない。そこで、比較的様相の明らかな加賀地域の資料を参考にこの点を考えてみたい。

加賀の須恵器生産の開始と編年の諸問題　最古の窯跡資料は二ツ梨東山４号窯Ｉ次床であり、これを標識とする南加賀窯編年（望月1990）Ⅱ期はＭＴ15型式併行期とされている。一方、ＴＫ47型式併行とされる同Ｉ期は、古墳出土品をもとに設定されており、そのため短脚の有蓋高杯は卓越するが、蓋杯は少なく、その形態的特徴が必ずしも明らかとはなっていない。しかし、一般には各器種とも「ＴＫ47型式的な」と俗称されるような諸属性を備えたものとして理解されており、蓋杯でいえば、法量が小さいこと、口縁端部の内傾する段や面の存在、稜の形態などが指標



第17図　北陸の６世紀初頭前後の杯類（Ｓ＝１／６）

となっている。

第17図にはⅠ～Ⅱ期の蓋杯のうち、セット関係を考慮して法量の小さいものを主体にあげた。この中で、下開発遺跡や下開発茶臼山14号墳の蓋杯を例にとると、身は古相を呈するが蓋の形態からは陶邑ＴＫ47窯の主要型式には対比できない。矢田借屋古墳群他の古墳出土須恵器についてみても、Ⅱ期（ＭＴ15型式併行）の大型品に共伴して、細部に古相の面影を残す小型品も出土している（ただし、これらは横穴系の埋葬施設であり、副葬の同時性は必ずしも保証されたものではない）。

これらの須恵器の編年的位置付けを行う際の、型式学的操作については、以前に指摘したように、あらかじめ型式認定作業を行った後に、その共伴関係を検証するという手順を踏まえる必要がある（田嶋・北野1992）。ここでその具体的検討はできないが、大まかな見通しを示しておきたい。

杯・有蓋高杯のＴＫ47型式からＭＴ15型式への変化の方向性としては、法量の大型化や口縁端部・稜形態の鈍化という点があげられるが、それ以外では器形の偏平化という要素がある。これは特に身でいえば、受け部以下の器形に関わっており、深身で腰の張る（受け部直下の角度が急）器形から、浅く斜めに立ち上がっていく変化といえる。受け部径に対する底径の小型化ともいえ、その製作技法上の指向性は、以後７世紀前半まで一貫して続く。小型法量の一群の蓋杯でこの特徴を持つもの（身が口径10.0～11.5㎝前後、器高約5.0㎝以下）は将来ひとつの型式として認定できる可能性があり、有蓋高杯では借屋４号墳（樫田他1989）、下開発茶臼山５号墳（西野1982）出土品が該当する。

蓋は口縁部が直線的ないしはやや外反気味に垂下し、明確な稜を持つものをＴＫ47型式に対応するものと捉え、口縁部が内湾気味となって稜の不明確なもの（下開発遺跡、下開発茶臼山14号墳、下開発茶臼山５号墳Ｐ４・６）はそれには含めない。これらに共伴する身は、立ち上がりの内傾が強いといった新しい要素もあるが、ＴＫ47型式の特徴をいくつかは持っており誤認定の恐れがある。

このように考えると、第17図の古墳出土須恵器の古相を呈する一群についても、いずれもＴＫ47型式に対比させることはできない。また下開発茶臼山古墳群では、東支群の６号墳の有蓋高杯がＴＫ47型式であり、５号墳のものが仮設型式に対応する。さらに、和田山23号墳（河村1983）出土有蓋高杯Ａ類（推定陶邑産、ＴＫ47）は下開発茶臼山６号墳のそれと同類であることが指摘（河村1983）されており、これらと共伴した推定在地産のＢ・Ｃ類[1]はＴＫ47型式期に併行する段階のものの可能性があることになる。

この仮設型式が（ＴＫ47型式期に続く）南加賀窯Ⅱ期に含まれる公算は強いと考えるが、Ⅱ期の主要型式との共伴例の蓄積を踏まえてその位置付けを行いたい。現状では、蓋杯でＴＫ47型式に共伴する在地産型式の認定はできないが、大菅波Ｄ遺跡のものなどがその可能性を持つであろう。

本遺跡出土の蓋杯の編年的位置を議論する前置きとしては甚だ冗長な内容となったが、行論の主旨のとおり、能登－鳥屋窯産須恵器の資料の増加とその型式学的研究を待って再論したい。

注１）ロクロの回転方向は在地産の可能性のあるＢ類（左）、Ｃ類（右）で異なっている。南加賀窯のヘラケズリにみるロクロの回転方向は、二ツ梨東山窯跡群や南加賀の古墳出土蓋杯のデータからみると、Ⅱ～Ⅲ期は左右両者が拮抗している（やや左回転の多い可能性がある）。和田山23号墳例のように、開窯期にあたり、技術的保守性をもった初期製作工人ごとに技法が異なるせいであろう。

しかし、Ⅳ期以降（二ツ梨東山１号窯段階）は、両者が並存しつつも明らかに右回転が優位となっていく。在地での技術伝習が行われて技法が固定化していく過程とみられる。

そして、７世紀のある段階からは、新たな技術伝習システムの下、右回転に固定化して行くものと予想される。ただそのような中にあっても、辰口町来丸サクラマチ３号窯（安他1993）のロクロ回転にみるように、異質な技術が時折貫入することはあったであろう。

引用文献

樫田　誠他　1989　『後山無常堂・後山明神３号墳』　小松市教育委員会

河村好光　1983　「須恵器在地窯の成立をめぐって」『北陸の考古学』　石川考古学研究会

木立雅朗　1991　「加賀・能登における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号　北陸古代土器研究会

田嶋正和・北野博司　1992　「加賀市大菅波Ｄ遺跡の須恵器について」『北陸古代土器研究』第２号　北陸古代土器研究会

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

西井龍儀他　1988　「氷見市園カンデ窯跡」『大境』第12号　富山考古学会

西野秀和　1982　『辰口町下開発茶臼山古墳群』　辰口町教育委員会

浜岡賢太郎他　1965　「能登鳥屋古窯址群の調査（第１次）」『石川考古学研究会々誌』第９号　石川考古学研究会

福島正実　1982　「柳田ウワノ１号窯跡」『柳田タンワリ１号窯跡』　石川県立埋蔵文化財センター

宮下栄仁　1992　「柳田ウワノ１号窯」『眉丈台の遺跡群』　羽咋市教育委員会

望月精司　1990　『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』　小松市教育委員会

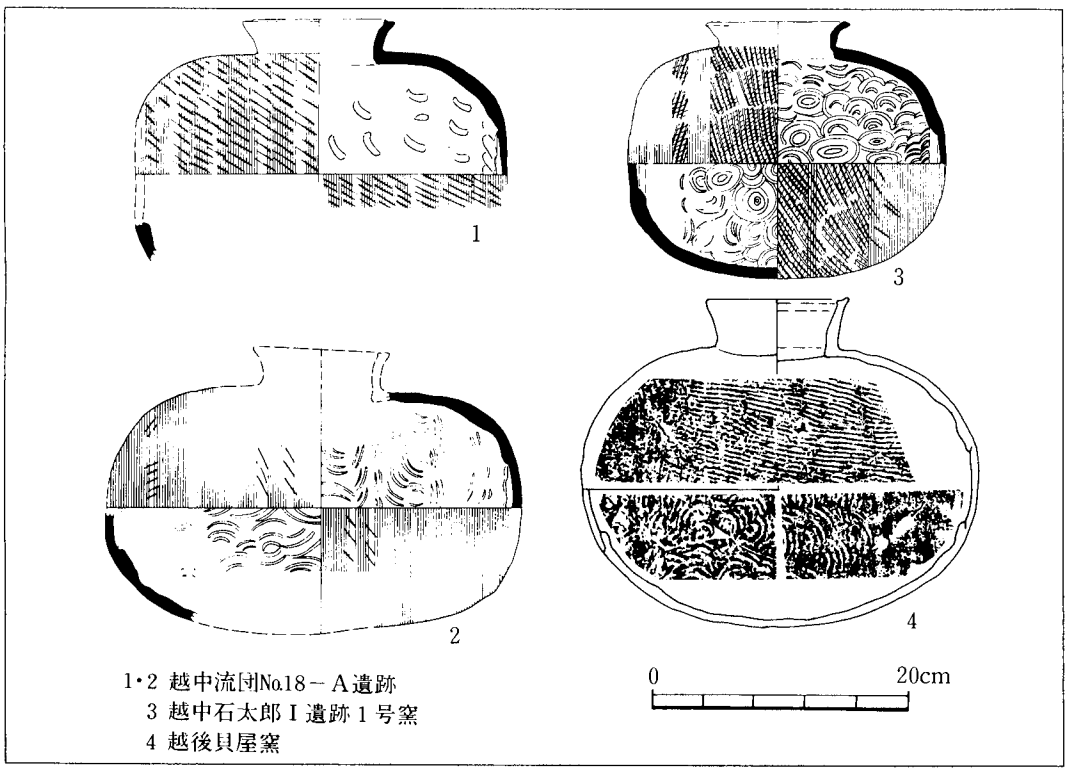
安　英樹他　1993　『県土幹線軸道路整備事業（加賀産業開発道路）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター

山本直人他　1989　『水白モンショ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

２．両側閉塞円盤横瓶の新例

横瓶の製作技法上特殊な例として、その技術系譜が注目される両側閉塞円盤横瓶は、以前の集成（北野1993）では、越前１例、加賀１例、越中３例、越後２例の各窯跡等で確認できた。時期は８世紀初頭を初現とし、同後半に北陸北東部で目立つようになる。今回、本遺跡で出土したものは、胎土から鳥屋窯跡群産と推定されるもので、これまで北陸のなかでは空白地であった能登での初例となった。胴部形態や成形・調整技法からみて８世紀後半代のものと推定する。

両側閉塞円盤横瓶は、その後、越中と丹後で類例が発見された。前者は小杉流通業務団地内遺跡群№18Ａ遺跡（富山県埋蔵文化財センター1993）で、須恵器窯に関連する谷の埋土から出土し



第18図　両側閉塞円盤横瓶の諸例

た。時期は8世紀中葉である。報告されたものはほとんど当該技法によるもので、富山県小杉町赤坂C遺跡須恵器窯、新潟県加治川村貝屋窯と並んで、一窯での集中生産の例にあたる。

後者は、北陸以外で初めて確認したもので、京都府熊野郡久美浜町の堤谷窯跡群（肥後ほか1993）の2号窯の灰原出土品である（肥後氏御教示）。時期は8世紀前葉である。

現状では全般的に西古東新の傾向を指摘できるが、特に8世紀後半のあり方は興味深い。越中国の射水丘陵窯跡群、越後国の北東部といった具合に、分布に地域的なまとまりの強い点である。越中・越後は、8世紀後半代に、貯蔵具類では横瓶とともに長胴短頸壺という器種を量産しており、北陸南西部に対する地域的特質のひとつとなっている。

このような分布状況は、8世紀前半代に散在的に広がった特異な技法が、8世紀中葉を画期として、地域内で固定化されていく姿を示していると考える。越中では、射水郡内の窯場にみるように、一地域では集中的に当該技法が顕在化するが、他郡の窯場では今のところ確認例はない。あたかも、技術の再生産（技術伝習）が郡程度ないしは窯場毎といった、狭域を単位に行われたことを示唆するがごとくである（言い替えれば、その枠外からの新たな技術導入や規制が相対的に弱まった）。また、射水郡から越後北部へ（7～8世紀代の柵戸のように）技術保持者が移住した可能性すらあろうか。もとより、僅かな製作技法の特徴から窯業技術の系譜や生産構造を考えるのは早計のそしりを免れないことは承知しているが、今後は多くの技術に焦点をあてて同様の視点からの検討が必要であろう。

8世紀前葉から中葉にかけては、須恵器生産の様々な技術分野（窯構造、窯詰め技術、焼成技術、製作技法）で新たな技法導入の画期がある。その段階で比較的共通性をもった土器組成や技法も、その後の地域的な展開の中で、窯場単位や郡単位、国単位、数国単位といったいくつかのレベルで「地域（方）色」をみせてくる。このような地域色を生み出す背景には、地域的・世代的な技術の再生産システムになんらかの変化のあったことが原因のひとつと考えるが、その解明には、前記作業の積み重ねが不可欠であり、すべては今後に残された課題である。両側閉塞円盤技法の横瓶の追跡は、その作業の一環であり、類例の増加を待って検討していきたい。

引用文献

北野博司　1993　「横瓶あれこれ」『北陸古代土器研究』第3号　北陸古代土器研究会

富山県埋蔵文化財センター　1993　『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第10・11次発掘調査概要』

肥後弘幸他　1993　「国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報（1993）』3　京都府教育委員会

追　記

脱稿後、平成4・5年度に鳥屋町教育委員会が発掘調査した末坂ハセタンA地点窯、同B地点（いずれも8c後半）から数個体の両側閉塞円盤横瓶が出土しているのを知った（干場道治氏御教示、実見）。一窯での集中生産の事例の可能性もあり、今後の整理を待ちたい。

第5章　まとめ

大津ロクベエ遺跡第2次調査では古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世以降の遺構・遺物を確認した。

古墳時代前期には遺構は検出されなかったものの、谷部を中心に土器が出土しており、周辺に遺跡が存在することが窺われる。

5世紀末以降8世紀前半代には、小規模な平坦面、土坑が築かれ耕作地となる。ＳＫ09の焼土・土器からは、住居とは言えないまでも、耕作時の休憩場所程度の役割は果たし得るような施設の存在が想像される。ただ、そうした場合、検出された耕作溝はあまりに少なく、未調査に終わった南方部への広がり、溝を伴わない耕作地の存在の可能性も考えねばならない。なお、第2次調査区南部に設けられた、第1次調査時の試掘トレンチ排土から7世紀代の須恵器が採集されているが、本調査では明確に同時期に位置付けられる遺構・遺物は確認されなかった。ただし、ＳＸ02が当該期に比定される可能性は残されている。

8世紀後半代には斜面を切り開いた大規模な平坦面を造成し、耕作地を繰り広げる。検出された耕作溝は100～150㎝を主体としており、一般に中世の遺跡などで畑の畝溝と認識されているものに比べると短い。しかし、それらの多くは平野部で検出されたものであり、丘陵斜面を切り開いて設けられた本遺跡の耕作溝とは性格の異なるものである。緩斜面に築かれるという制約、或いは作物の違いによるものと思われるが、古代の耕作地の類例が乏しく、時期的な理由も含めて考えておきたい。

中世になると道状の遺構、斜面を掘削した小規模な平坦面等が築かれる。後者には集石がみられ、中世墓との関連も考えられるが、攪乱を受けており、その性格については定かではない。

近世以降には林業に伴うと思われる溝等が確認されるのみである。

以上概括すると、本遺跡第2次調査区は5世紀末以降古代前半代まで規模を変えながら耕作地として利用される。それが中世になると様相を変え、道或いは墓となり、一帯には草木が繁茂していたと推測される。近世以降には樹木に覆われ、いつの頃からか林業の場になったのであろう。何れの時代も建造物の痕跡は検出されず、集落は周辺地域に求められるが、現時点では確認されていない。次に第1次調査区との関連を考えてみたいが、明確に交差する時期はない。縄文時代の自然河川埋没後は中世初頭まで人為的働きかけはなく、弥生時代から古代にかけては遺物すらも出土していない。中世になって初めて畑地として利用されるようになる。その空白を埋めるような形で本年度調査区は存在する。これは町道北側の古墳時代から古代にかけて存在した遺跡が中世になって南側に広がったという形ではなく、むしろ遺跡が移動している。しかも同じ耕作地としての利用であり、北方の耕作地が南方に移ったものと考えられる。その理由は作物の違いであったかもしれないし、耕作者の交替であったかもしれない。しかし、南方で耕作が開始されるのは12世紀後半を少し溯る頃であり、8世紀後半を主体とする北方の耕作地とはかなりのずれがある。間を埋める9～10世紀については溝が確認されているのみであり、11世紀代に関しては遺物も確認していない。そのため、南北の耕作地に直接の関係は考えられず、古墳時代から中世に

かけて付近一帯が主に耕作地として利用されたとのみ述べておきたい。

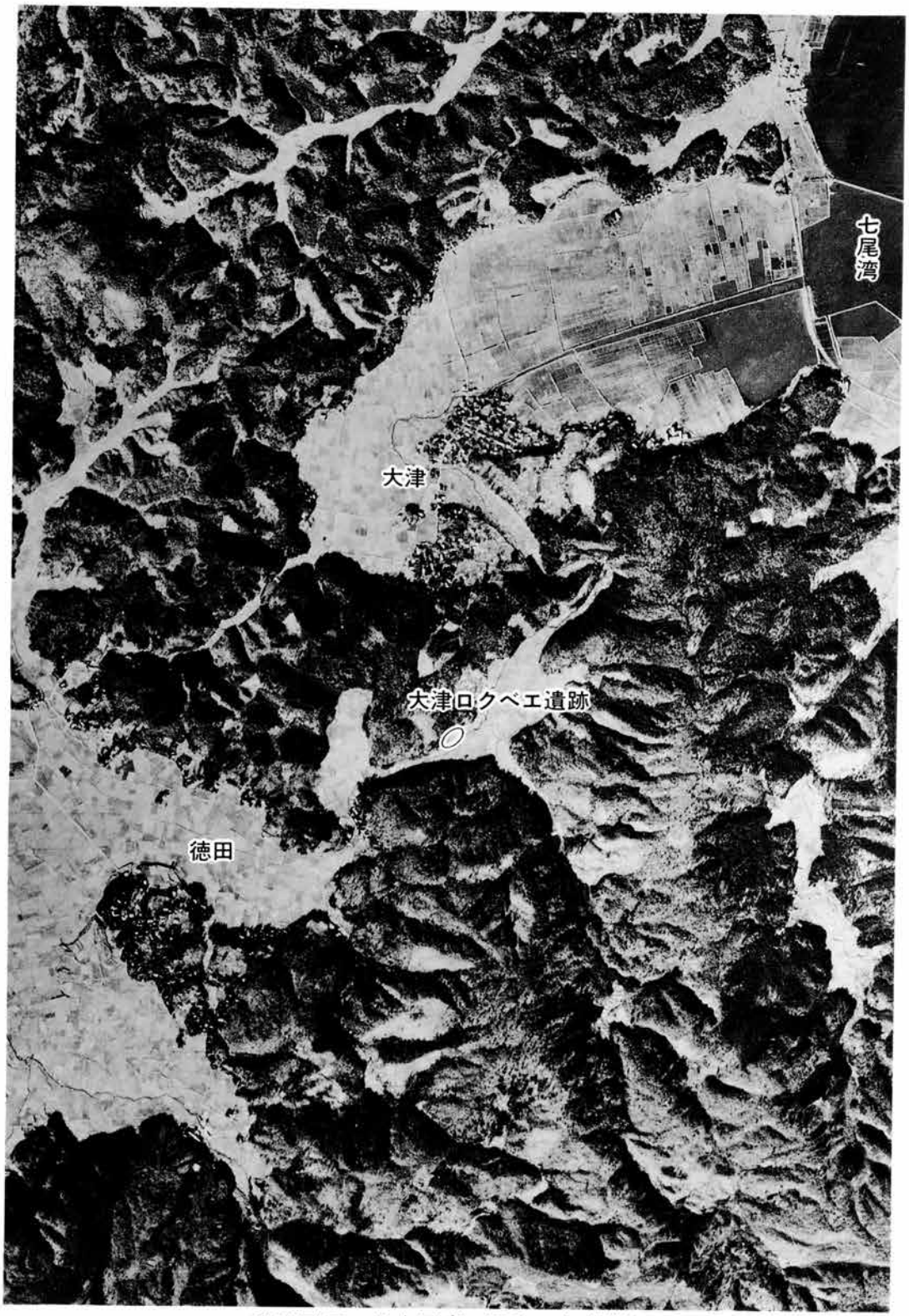
参考文献

田鶴浜町役場　1974　『田鶴浜町史』

土屋宣雄・木立雅朗　1993　『大津ロクベエ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

若林喜三郎・高澤裕一監修　1991　『石川県の地名』　平凡社

角川日本地名大辞典編纂委員会編　1981　『角川日本地名大辞典』17石川県　角川書店



遺跡周辺の航空写真（昭和22年撮影）

西側調査区表土掘削作業（北東から）

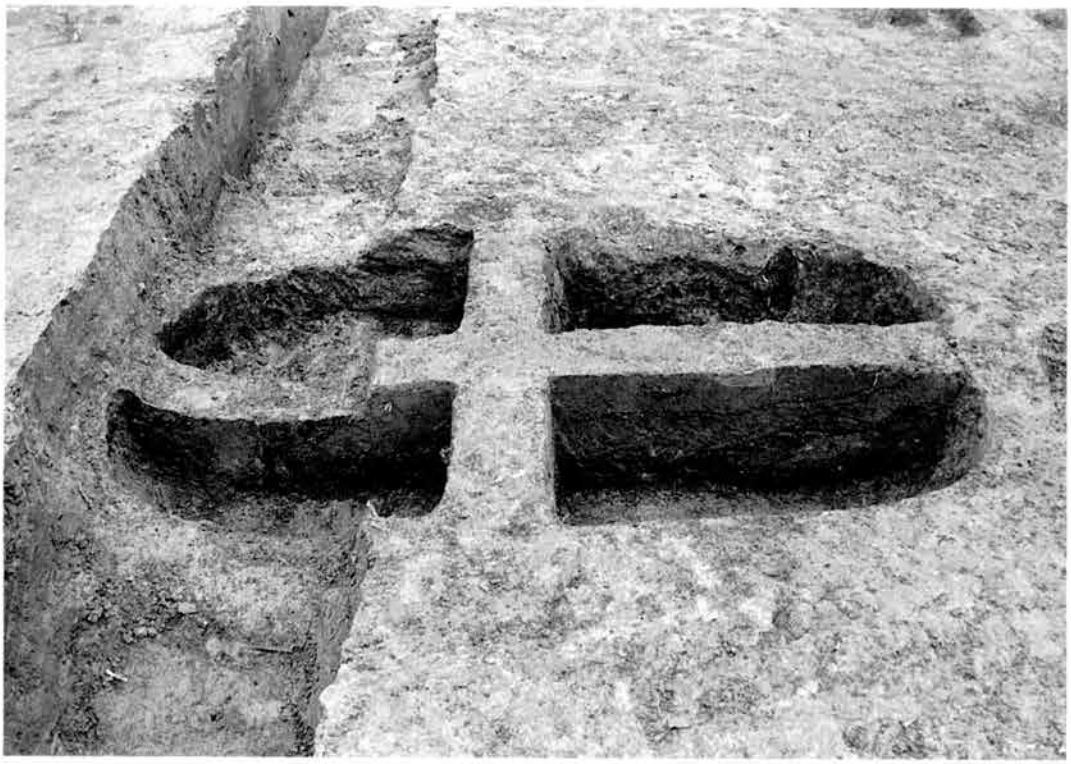
調査区全景（北西から）

東側調査区表土掘削完了状況（南西から）

谷部土層断面（南東から）

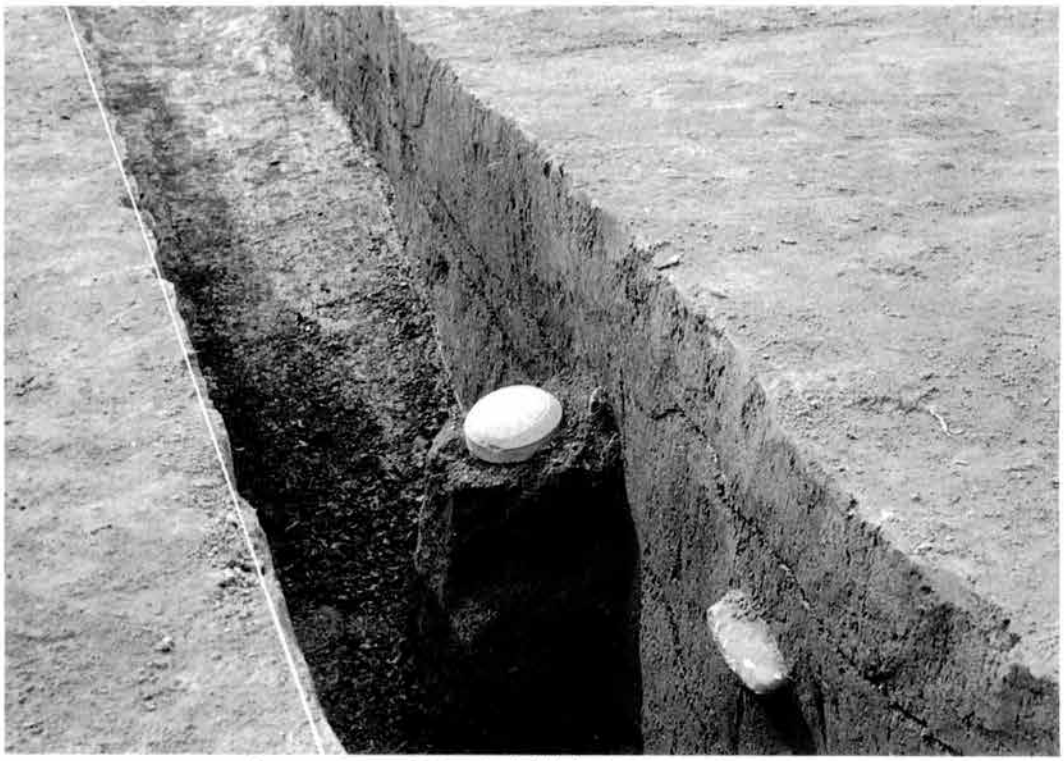
SD07　集　石　（南西から）

SD07集石除去後（南西から）



SK05土層断面（南東から）

SK05完掘状況（南東から）



トレンチ１（SK09）坏蓋出土状況（南東から）

SK09完掘状況（北から）

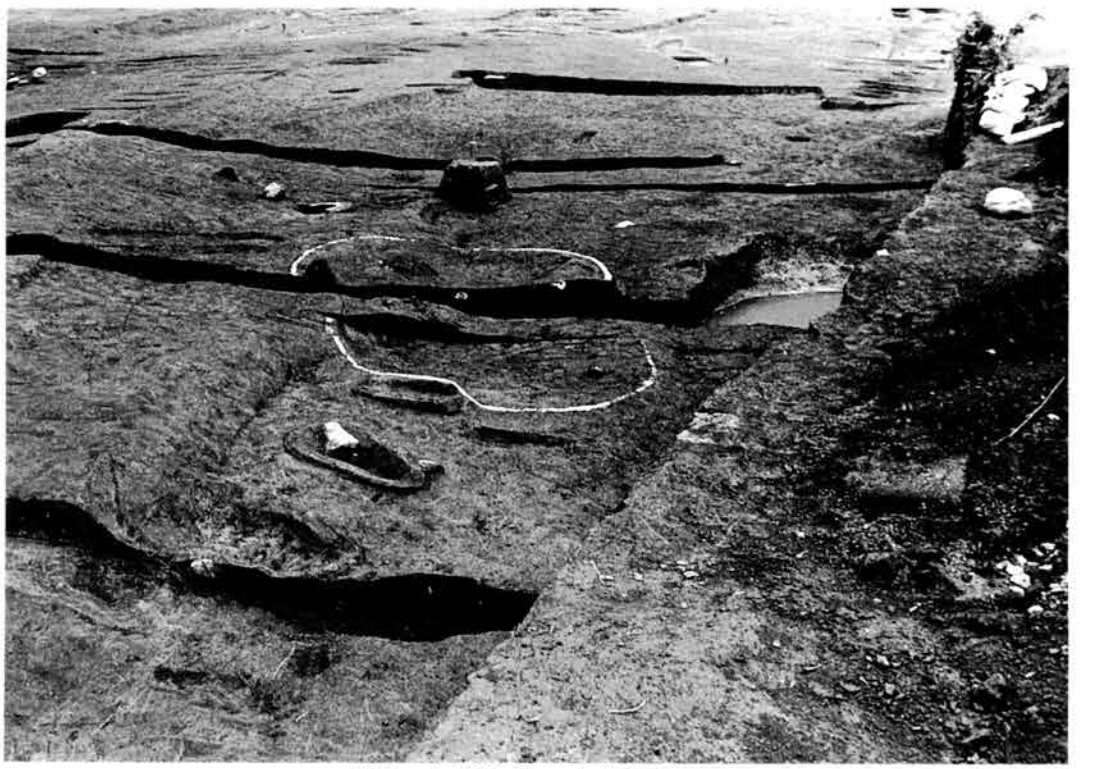
SX01調査状況（南東から）

SX01完掘状況（南東から）

SX01完掘状況（北から）

SX01完掘状況（西から）

SX02完掘状況（北東から）



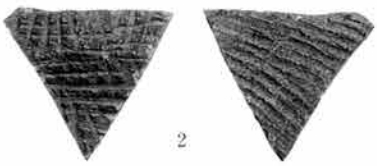
SX03完掘状況（南東から）

西側調査区表土掘削完了状況（北西から）

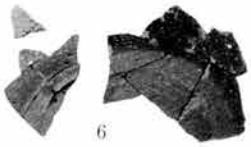
西側調査区完掘状況（北西から）

図版 11（10は1/4・その他は1/3）

1


2

5


6

3

8

7

4

9

10（外面）

10（内面）

10（底部側閉塞部）

10（口縁部側閉塞部）

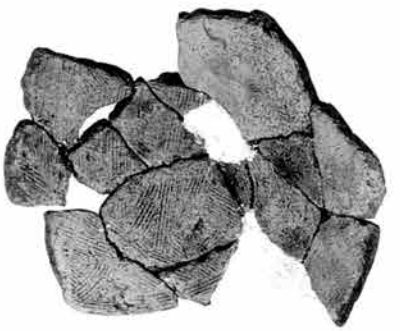
図版 12（12は1/2・その他は1/3）

11

12

13

14


15

16

17

大津ロクベエ遺跡Ⅱ

一般国道470号線(能越自動車道)改良工事
に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成6年8月6日　印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番（代）

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社

金沢市御影町19番1号

©石川県立埋蔵文化財センター　1994